

## 南朝太平記 卷第十九

### 洛中騒動の事

爰に將軍尊氏卿は、執事高師直が奢侈を惡み、豫て直義朝臣と心を合せ、師直を誅せんと、色々術を巡らされけれども、師直に挾まれて、如何ともし給ふべきやうなかりければ、猶も種々の計略を構へ、終に師直・師泰を始め、高家の一族を悉く誅せられ、將軍は觀應二年二月廿七日の夜歸洛あつて、上杉朝臣の宅に寄宿せらる。舍弟直義入道は、八幡より上洛あつて、錦小路の本宅に入り給ふ。此間師直を誅せられん謀に、暫く敵味方になり給ふと雖、何か御隔のあるべきなれば、同三月六日、將軍錦小路の亭に入り給ひ、初めて和睦の御對面あり。様々の饗應善盡し美盡さる。宰相中將義詮朝臣は、同十日の夜、丹州より入洛し給ひ、直に錦小路の亭に行き向

ひ、武衛禪門に對面あり、御悅大方ならざりけるに、當時人の威を見ては猜み憤り、己れを立てんと思ふ。石堂・上杉・桃井は、様々讒を構へて、將軍父子に附従ふ人々を失はいやと巧み、仁木・細川・土岐・佐々木は、入道の方にて、人を人ともせざる上杉・石堂等を誅せんと、種々の謀をぞ巡らしける。讒者眞を亂すが故に、羽林相公名義詮尊氏嫡と武衛禪門と、不快の由聞えけるが、洛中の騒動斜ならず。是に依つて慧源將軍に對面し、心底を盡して、政務の事を謝せらる。是れ更に身の爲に非すと雖、相公不快の上は、速に辭し申す所なり。毎事口入すべからざるの旨演舌し給ひ、西岡に引籠り給ひけり。然るに同廿二日の半更より、洛中物騒しく、武士東西に走り廻る。或は將軍車拔落し給ふともいひ、又は相公、今夜逐電し給ふとも風聞す。然れども皆空言にして、其實を尋ねれば、佞奸の輩、邪曲少々露顯するが故に、仁木右馬助・土岐刑部少輔・細川刑部大輔・春日雅樂助等、己が國々へ逃下りしに依つてなり。翌廿三日、政務の事、入道固く辭し給ふと雖、昨日より上杉彈正少弼朝定、將軍の御使として、往返七八度に及んで、終に本の如く禪門の沙汰たるべきの旨落居せり。是に依つて將



軍禪門相公三人、重ねて御合體ありぬれば、洛中も靜謐すべき所に、翌廿四日の夜、仁木兵部少輔細川阿波將監國清も、一向合戰の用意して、本國に逃下れば、洛中猶も穩ならず。淺猿しかりし事共なり。

赤松天寶林寺屬南方附陸良親王の御事

爰に赤松天寶林寺律師則祐は、初めより上洛せずして、赤松に居たりけるが、故兵部卿護良親王の若宮陸良親王を申賜はつて、和田・楠と牒し合せ、都へ攻上らんとぞ企てける。其故を委しく尋ぬれば、故兵部卿親王、號大塔宮過にし元弘年中、十津川に御坐ありし時、竹原入道が女を、夜のおとゞへ召され、只ならぬ身となりけるに、程なく郷民共心を變じければ、宮は十津川を拔落し給ひし故、彼女房は十津川に残りて、絶えぬ思ひに沈みながら、正慶二年の秋、宮の忘れ形見に、若宮生産坐しけり。然るに公家一統の御世となりしかども、斯くと申上ぐべき便もなく、其上幾年月を経ずして、建武二年に、宮誅せられ給ひしかば、其より人目を憚りて、深く隠し養育

せしに、又天下大に亂れ、後醍醐天皇芳野皇居に御坐ありしかども、未だ宮御幼稚なれば、母儀の閨中にして、年月を送り給ひける。然るに大塔宮に附従ひ奉りし平賀三郎片岡八郎は、宮薨去の後は、出家遁世の身となり、片岡は快心と號し、平賀は専心入道とぞ號しける。其後曆應四年の頃、平賀片岡兩人打連れて、熊野參詣しけるが、故親王の古も懐かしさに、竹原が館に入りて問ひければ、早入道は、身罷りて候と答へければ、兩人共に涙を流し、南無幽靈出離生死願證菩提と廻向して、其より入道が甥戸野兵衛が許へ行き、修行者なりと偽りて、一夜の宿を借りければ、兵衛悦び、客殿に請じ入れ、様々饗應して後、旁は定めて聞及び給ふらん。一年大塔宮、此山中に忍び坐せし時、某身不肖には候へども、無二の忠心を以て、叔父竹原入道と心を合せ、黒木の御所に宮を入れ奉り、恙なく守護し奉りしに、熊野別當武家に屬し、野心の者多く出來りしに依りて、又此所を忍び出でさせ給ひき。其後御本意を達せられ、公家一統の御世となりけるに、如何なる業因の御報にや。武臣の爲に害せられさせ給ひぬれば、恐れながら某如きに至るまで、悲歎の涙に袖を濡し、



毎日御後世を弔ひ奉り候が、今日は尊儀性靈の七回忌に相當り候故、賤しき身ながらも、志を以て、今朝七口の僧を請じ、御菩提を弔ひ奉り候。御僧達も逆縁ながら、御跡を弔ひたび候へと、涙と共に語るを聞きて、間を隔てたる傍に、女房の聲してさめくと泣く。片岡平賀目配せして、斯る忠節の者こそなけれ。此女性は、正しく宮の妾竹原が娘ござんなれと、坐に袖を濡しけるが、片岡入道涙を押へながら、如何に兵衛殿我々を見知り給ひつるや。古の片岡八郎平賀三郎にて候ぞや。親王不慮の害に遇はせられし後、我々も世を捨て候が、當年は宮の七回忌に相當り候故、靈佛靈社を順禮して、御菩提を弔ひ候が、今日は都にて、相應の追善をも營まばやと存候ひしに、兎角して日數を経、今日爰に來ること、世三の値遇と存するなり。竹原殿の御事、又御息女も、只ならぬ身にて坐せしかば、其事の聞かまほしく、尋ね申して候へば、今はなき身と承り候ひし程に、餘所ながら此事の承りたく、立寄り候と、墨染の袖を顔にあて、さめくと泣きければ、兵衛も涙を押へ、其宮の御事候よ。既に生長坐すに付きて、唯人ならぬ御身なれば、如何なる目をか見んすらんと存じ、

某の計らひとして、竹原が子供にも忍ばせ、彼女房が行衛を知らずと披露せさせ、某の方に隠し置き奉りて、今年九歳にならせ給ひ候といふ。平賀片岡大に悦び、兩人一旦形を變へ、斯る身とはなりたれども、若宮成人坐さば、忍びやかに御供し、芳野殿に奏聞を経、天下を一統して、故親王の舊恨をも散じ奉らばやと存するなり。今とても生残りたる宮の、故舊の者共多かるべしといへば、兵衛大に悦び、其より三人相共に、種々謀をぞ巡らしける。斯くて南朝の興國三年十一月八日、戸野兵衛重友平賀片岡三人心を合せ、御母堂には隠し、若宮を具し參らせ、吉野の皇居に參り、四條中納言隆資卿を以て奏聞せられければ、主上大に叡感あつて、早く官軍を催し、朝敵退治の謀を巡らすべしとて、二品親王の宣旨を蒙らせ給ひける。赤松律師則祐は、播州赤松に居たりけるが、將軍と快らざる折なれば、此事を傳へ聞き、心に案じけるは、某父子、先年師直に與し、渠が重代の太刀懷劔を得たりしかば、尊氏兄弟、某を無二の師直方なりと思ひ給はんずれば、幸此宮を取立て奉るべし。其時勢來らば、運に乗じて宮を武將と仰ぎ、某日本を奉行せん。又宮方となりて強く軍せば、將



軍もなか免し給はざらん。然らば宮を捨奉るか、よし又大塔の若宮なれば、養育し奉るとも、苦しからじと思案して、平賀片岡は舊友なる故、忍びやかに使を送り、此事をいひければ、平賀片岡大に悦び、芳野殿へ奏聞を経ける所に、楠正儀強ひて申し進むるにより、君御許容あつて、宮を播州に下し給ひしかば、則祐悦び、世に深く隠し、天下の變をぞ相待らける。然る所に師直兄弟誅せられて後、尊氏直義暫く和睦のやうなれども、洛中穩ならずと聞えければ、又隠謀を企て、和田・楠と牒合せ、天下を覆さんとぞ催しける。

### 南帝與尊氏卿父子御和睦の事

然るに佐々木佐渡判官入道道譽は、江州に逃歸りて逆心を企る由聞えければ、觀應二年七月廿八日の辰の刻、尊氏卿江州に進發し給へば、武衛・禪門・宰相中將殿、河原の邊まで打送りて歸り給ひ、相公は翌日、赤松誅伐の爲、播州に發向し給ひけり。斯る所に同晦日の夜、直義入道都を忍び出で、北國を指して落ち給ひしかば、同八

月三日、義詮朝臣は、播州より歸洛あり。將軍は同五日、江州石山より歸京坐しけ

り。太平記に、此時將軍父子京に居給ひしやうに書きしは誤なり。將軍猶も細川陸奥守を、北國に差遣され、早く歸洛あ

るべき旨、懇望し給ふと雖、桃井直常以下同心せざるの間、將軍江州に進發し給ふ所に、入道大に利を失ひ、東國に落ち給へば、將軍は歸洛し給ひけり。然るに尊氏卿、京都の物騒がしきに付きて、南方の敵隙を窺ふことありぬべしと思慮し給ひ、去る三月より、南方と和睦の事を望み給ふ。是に依つて南帝楠正儀を召され、此事如何あらんと敕諭あるに、是こそ願ふ所の幸にて候。詐つて御和睦候べし。其上にて、尊氏を追落さん謀は、如何程も候べしと申されければ、君も御許容坐しけり。同八日、法勝寺の慧鎮上人、南方に参りて、和睦の事を取繕はるゝと雖、聞召入れられず、空しく追上さるゝ所に、將軍又二階堂三川入道を播州に差遣し、此事を説かしめ給ふ。是に依つて赤松律師則祐、南方へ申入るゝの間、芳野殿御許容坐す氣色坐せしかば、今は和議成就せん事疑なしとて、一向直義入道征伐の謀を巡らされけるが、猶も京都心元なしとて、相公詮を都に残し置かれ、將軍は翌十三日、直義誅伐の爲め關



東に進發ある。同十一月朔日、赤松妙善律師則祐上洛す。是れ南北の御和睦事なりしに依つてなり。南方の使僧忠雲僧正、此間宇治まで來着し給ひけるが、同二日に入洛あり。翌日相公、賀茂の親承法印の坊に於て、忠雲僧正に對面あり。南帝の繪旨二通相渡さる。一通は赦免、一通は直義追討の繪旨なり。太平記に、十月三日北帝の繪旨を賜りたりとは大に非なり南帝の繪旨なる事明けし。十月三日といへるも非なり。其繪旨の文に云ふ、正平六年十月廿四日、左中將具忠とあり。公家の事は、一圓に南方の御沙汰たるべし。武士の事は、今まで召仕候上は、管領すべしとの赦許なり。同八日、四條隆資卿洞院實世卿出京あつて、京都の事を沙汰し給ふ。同廿四日頭中將具忠、南朝の御使として入洛せらる。是れ主上も、早く京都に還幸あるべしといへども、北國東國未だ靜謐せず、其上今年塞りの方なれば、明春出御あるべきとの御事なり。是に依つて同十二月廿三日、北朝の劔璽内侍所を南朝に渡されて、太平記に、正平六年閏二月に作るは非なり北朝の觀應の年號を廢し、南朝の號を用ひ正平六年とし、同廿八日、北京崇光院に、太上天皇の尊號を奉らせ給ひ、院御所と號し奉る。さる程に尊氏卿は、關東に進發あり、同十二月薩埵山にて、直義入道と合戦に及びけるが、禪門戦利なうして、伊豆御山

南北朝御和睦

足利直義死去

に落ち給ひける所に、又和睦の儀を取計る人々ありしかば、重ねて兄弟御和睦あり。正平七年正月六日、將軍・禪門諸共に鎌倉に入り給ひけるが、同二月廿六日、延福寺に於て、御年四十七歳にて、鶴毒に侵され、逝去し給ひけることを哀れなれ。

### 宮方京攻附細川頼春討死の事

さる程に南帝後村は、正平七年二月廿六日、都に還幸あるべしとて、芳野の皇居を出御あり、東條の城に、一夜御逗留なされ、翌廿八日、住吉に行幸あつて、同閏二月十六日太平記に、十五日天王寺に行幸あり。然るに一向合戦の御用意ある由聞えければ、洛中曾て穩ならず。是に依つて義詮大に怖れ給ひ、皆法勝寺の慧鎮上人を使として、其眞偽を正さんが爲、南方に差遣はさるゝ所に、主上上人を近く召され、天下未だ靜謐せざるが故に、非常を誡めんが爲に、官軍を召具せらるゝ所なり。何ぞ君臣和睦の上に、今更異變あるべきやと、救答あつてぞ返されける。斯る所に同十九日夜、洛中何となく物騒がし。曉に及んで南帝八幡に着御あり。翌廿日の早旦太平記に、廿

宮方京攻附細川頼春討死の事



七日に作るに、伊勢國司中院右衛門督顯能、三千餘騎にて、東寺口より押寄せらる。楠は非なり左衛門尉正儀、和田五郎正隆は、五千餘騎にて、七條大宮へ押寄する。千種少將顯經忠顯の子日來丹波に居られければ、五百餘騎にて、唐櫃越より、内野を指して押寄せらる。義詮大に驚き給ひ、有合ふ勢を従へ、七條大宮邊に打出で給ふ。此度楠は、千劔破を出でられける時、故和田源秀鏑を用意せられつるは、正儀が感心せし所なりとて、和田も楠も、鏑五十本、柄をば二間半にして、中間共に持たせたりけるが、和田、楠兩手にて、百本の鏑を卅本づつ一組にして、太刀の兵弓の兵三人一揆にして、三段に立てたりけるが、一枚楯の裏に、算を繁く打ちて、梯の如く拵へたりけるを、民家の垣に打懸け、射手を登せて、敵を目の下に下見し、散々に射させたり。京勢の先陣細川讚岐守頼春、的になつて射立てられ、辟易して見ゆる所を、和田、楠五百餘騎、轡を雙べて駆破る。頼春も武功の人なれば、中を開いてやり通し、馬の足を立替へて、前後を顧みず、駿馬に鞭ちて、咄と喚いて懸けられしかば、楠勢其猛威にや怖れけん、先駆の兵六七騎、勇氣に怯んで引退く。逃ぐるを急ぎ拉ぎ、敵の着たる兜蓋の

細川頼春  
死

足利義詮  
近江に逃  
る

鉢、馬の三頭、二つ三つ丁々と打ちて、鞭に鎧を合する所に、頼春の乗られたる馬、敵の打太刀にや驚きけん、弓杖三杖計りぞ飛びたりけり。頼春鞍壺に乗直つて、鎧を踏直し給ひける時、敵透間をや窺ひけん、鏑を以て内兜へ突込んだり。突かれて振仰ぎける所に、小家の軒に出でたりける竹の端はなに、兜の鏑を引懸けて、抜かんとしける所を、鏑の者共走寄り、馬の太腹を突いて刎落させ、透間なく取圍む。頼春伏し乍ら、敵二人の諸膝を薙いで切据ゑ、起直らんとする所を、和田五郎正忠、今年十六歳になりけるが、走り懸つて首を討つ。此頼春は、時の侍所にて、武威を都鄙に振はれしに、今日は七條油小路に骸を曝し、戦場の土となられけるこそ哀れなれ。頼春討たれて、京方既に敗れければ、義詮朝臣は、江州四十九院に落下りて、軍勢を集めて、再び本意を達せんとぞ催されける。

兩上皇新院遷幸芳野附中納言局詠歌の事

斯くて翌廿一日、藏人右衛門佐光資、敕使として參上し、兩上皇光嚴院・新院崇光春宮

兩上皇新院遷幸芳野附中納言局詠歌の事



仁直を、南山に遷し奉るべしとの敕誼なりと、奏せられければ、皆々只呆れさせ給へる計りにて、御涙に伏沈ませ給ふ。夜に入りしかば、雨少し降りけるに、御車を差寄せたれば、兩上皇・新院・春宮御同車にて、其夜は東寺に着御ある。御供には、教言朝臣・實言朝臣太平記に、實春に作るは非なり・北面康兼計ぞ御供には候しける。斯くて翌朝三院を、八幡まで御幸なし奉り、其より東條に移し奉りて、同六月、賀名生初號三穴太一後改賀名生へ還幸なし奉る。梶井宮二品親王尊胤も、同じく捕はれさせ給ひ、垂髪一兩人・坊官一人を従へられ、南方に赴かせ給ひ、金剛山の麓に押籠められさせ給ふ。三院は、崩れ傾きたる庵室の、見るも淺間しきに所々を、篠にて厳しく圍ひなし、猶も棘枳を隙なく植ゑたる内に押籠められさせ御坐せば、餘所の見る目もいと悲しく、櫻より外は、御心を慰むべきものもなかりければ、翌年の春、中納言の局、

かゝる世もよしや芳野の山櫻宿の物とてかざしにもせんと奏し奉られけるぞ優しき。

### 梶井宮拔落附律師元祐の事

梶井二品親王は、同五月、南山に遷されさせ給ひ、柴の庵に住ませ給ひ、山本三郎承りて、厳しく守りけるが、程なく二月計りありて、御邪氣の心地出來らせ給ひ、日に添へて重らせ給ひければ、警固の武士山本、如何はせんと驚きて、峯通る山伏もがな、祈らせばやとて、士共を所々に分けて尋ねさせけるに、翌日殊勝氣なる山伏を、三人具して來れり。宮悦ばせ給ひ、御枕近く召して祈らせられけるに、二日計りありて、御病氣忽平癒しければ、御布施など賜はりて、御悦び限りなし。武士共にも御酒下されければ、夜深くるまで謠ひ舞うて遊びけるが、山伏は曉御暇を賜はつて、また闇きに歸りけり。辰の刻計りに、宮の御坐さぬといふ程こそあれ。扱は彼山伏に、盗み出されぬこそ安からねとて、關々へ人を走らし、山伏を止めけれども、宮は早虎口を遁れさせ給ひ、其夜興福寺まで落延びさせ給ひけり。是は御門徒の律師元祐といひしもの、豫て謀を巡らし、宮と心を合せ參らせ、己は山伏となりて、大なる



笈を負ひけるが、此笈の中に宮を入れ奉り、落行きけるとぞ聞えし。

### 源相公歸洛の事

さる程に義詮朝臣、江州四十九院にありて多勢を催し、近日上洛の由聞えしかば、楠正儀、節刀を賜はつて江州に罷向ひ、誅伐仕り候はんと奏しけれども、北畠准后支へ給ふに依りて許されず。楠も力なく止みける所に、相公義詮、三萬餘騎を引率し、同三月十日、四十九院を立ちて攻上らる。之を防んが爲に、大津に控へられたる中院宰相中將具忠、敵の多勢に聞逃して、八幡を指してぞ引かれける。正儀は、先立ちて此事を聞き、八幡の皇居に參り、既に中院相公、戦はずして引取られ候由、敵は勝に乗りて、追懸け參り候はん。某今夜山科邊まで罷り向ひ、切所に勢を伏せて、義詮が通らん所を、不意に咄と駈入れば、勝利疑候まじと申されしかども、諸卿僉議あつて、敵は多勢の由聞ゆれば、小勢を以て、始終の勝利叶ふまじ。正儀若き將なれば、又討死せんも計り難し。八幡は究竟の要害なれば、敵寄せ來るとも、怖あるべからずと制せらる。然る所へ北畠右衛門督顯能、使者を以て使を馳せ、某も大津へ引入れられ候由、顯能京都に罷在り、大敵を防ぎ候はん事、叶ひ難く覺え候。急ぎ和田・楠を加勢に賜はるべしと奏せらる。正儀は、既に十死一生の合戦の圖は外れぬ。京にて敵を防ぐとも、利あるべしとも思はざりしかども、罷向ひ候はんと進まる。諸卿重ねて僉議あつて、楠向ひなば、討死をやせんすらん。兎角北畠金吾を召返さるべしとて、京都に敕使をぞ立てられける。同十五日の早旦、相公の勢、眞如堂神樂岡邊に充滿しけるが、未の刻に及んで、東山雙林寺阿彌陀峯に陣を取る。相公は、長樂寺の上の山に陣し給ふ。其勢雲霞の如くなり。顯能は、京にて一戦をと勇まれしかども、敕誼なれば力なく、淀・赤井までぞ引かれける。斯る所に相公、東寺に陣を移さる、由聞えければ、正儀又皇居に參り、明日義詮東寺に移り候由、忍びの者告知らせ候。然れば北畠殿は、宵より桂川を打渡り、川の向に兵を伏させられ候へ。正儀は、東山蓮華王院七條八條の間に懸り、明卯の刻、義詮、河原へ打出でん所を、一手に蓮華王院より駈出づべし。斯くして敵の騒動せん所へ、東山より駈出なば、勝利

源相公歸洛の事



を得べく候。北畠殿中院殿は東山に着し、先手の勢を打散らし給ふべし。然らば義詮を討つか、京を追落すか、二つの内に候はんと申されしかども、危き合戦なるべしとて、赦許なし。正儀、然らば淀赤井に打越え、顯能と一手になり、桂川を渡して戦はん、今夜寄すべしとは思ひもよらず、宿などとは犇き候はん。其上、京中の民家へ打散り居候はん所へ、押寄せ候は、味方の勝利疑候まじと申されけれども、當城は前に大河あつて橋船もなく、後は河州にて分國なり。斯る要害を出でて戦はんは、武略の足らざる所なりとて、御免しなかりしかば、楠大に悔え怒り、あら口惜や。武の家に生れん者は、討死を期すべき事なるに。今見よ。大敵に取巻かれ、飢死せんずるぞと、齒を切つて高聲に申し、陣所にぞ歸られける。同じき廿一日、相公、東寺に陣を移し給へば、顯能は淀を引きて、八幡の山下にぞ陣し給ひける。然る所に、正儀の乳母の夫、眞木右近申しけるは、如何に赦許なければとて、何時まで守ら候べき。一夜討たされ候へといへば、正儀是に同じ、和田安間以下五人十人づつ、忍びやかに陣中を出でける所に、如何してか叡聞に達しけん、宰相中將實勝を敕使

として、大に制せさせ給ひければ、力なくして止みにけり。

南朝太平記卷第十九終



# 南朝太平記 卷第二十

## 板倉平三大渡先陣并荒坂山合戦

### 附土岐康貞討死の事

さる程に義詮朝臣は、東寺に陣を移し給ふ所に、細川陸奥守顯氏、四國勢を率して上洛し、赤松妙善律師則祐も、官軍を引替へて、是も京都に馳加はりければ、相公愈力を得、同三月廿四日、陸奥守顯氏を總大將として、軍勢を差向けらる。此時義詮は、東寺にあり。太平記に自ら向うて洞峠に陣すとは誤なり。足利民部少輔氏經舍弟左近將監氏頼尾張守高經子甥兵部大輔詮經家長子七千餘騎にて、翌廿五日、大渡に打莅む。右衛門督顯能、河より向ふの岸の上に陣取りて、橋引落して侍懸けらる。是に依つて京勢如何はして渡さんと、暫く時を移す所に、板倉平三泰義、赤絲の鎧に、薄紫の母衣掛けて、栗毛なる馬に乗り、只一騎、川端

に歩ませ出で、昨日今日出來りたる川ならばこそ、皆々驚きもせらるべけれ。都より豫て此河ありとは、思ひ儲けしことならずや。さる元弘建武より以來、數度の合戦に、河を渡し先を駈けし兵多しと雖、誰か鬼神にて候べき。いで先駈して、名を後代に残さんと、小舟に掉し、流れを切つて押渡る。斯波兵部大輔詮經、板倉打たすな續けやとて、同じく河を渡さるれば、我劣らじと七千餘騎、一同に咄と押渡る。顯能暫く支へて拒まれしかども、小勢なれば叶はずして、終に繩手を引越えて、園寺口にぞ陣せられける。和田・楠は三千餘騎にて、荒坂山を支へらる。此へは細川陸奥守顯氏・同相模守清氏・土岐大膳大夫頼康・舍弟三河守康貞初名悪五郎六千餘騎、喚き叫んで攻懸る。楠方は、峯々に取登りたれども、未だ陣々を分けざりしかば、土岐・細川が勢に捲り立てられ、先陣は颯と散る。和田・楠少も騒がず、峯より峯に傳ひ、精兵の射手を以て散々に射させければ、寄手射白まされて進み得ず。正儀士卒を下知し、八百餘騎にて懸ければ、寄手谷々に捲り落され、死傷する者數を知らず。土岐三河守康貞は、天下に隠れなき打物の達者なりけるが、卯の花緘の鎧、同毛の兜蓋に、



渡り三尺計りに、金にて桔梗を打つて附けたるを、猪首に着なし、金作の太刀二振帯びて、練貫の白纒かけ、貳き者共の舉動かな。懸れや懸れと下知して、真先に進みけるを、和田五郎正忠、得たり賢しと向ふ。細川清氏の郎等關左近、和田を目蒐けて打つて懸る。正忠が郎等堺平次左近が只中を射通せば、三川守走り寄りて、關を引起さんとしたりけるを、平次二の矢に、康貞が脇立のわばの板を射通したり。三河守事共せず、射られたる矢を、脇立ながらかなぐり捨て、左近を引立て、二三町落行くを、和田五郎遁さじと追懸けしが、正忠も兜の吹返を、首の骨かけて射込まれたれば、目にかけたる敵を討泄らしぬと、安からず思ひけるに、三河守、春雨に、穿ちたる岸を飛越ゆるとて、片岸を踏崩し、谷へ百と落ちければ、正忠走り寄りて、長刀を取延べ、一人の敵を討取りたり。されども敵多勢なれば、楠方にも士卒多く討死しぬ。此上は明日の合戦に討死し、父兄の後を追ふべしと議せられければ、主上大に驚かせ給ひ、度々敕使を以て召されし故、此上は力なしとて、夜半に入幡へ引入れらるれば、翌日敵入れ替りて、荒坂山に陣をぞ取つたりける。

### 八幡落城附宰相中將實勝朝臣北方の事

さる程に京勢は、數度の合戦に打勝ち、八幡を十重廿重に取巻きければ、山上は次第に兵糧減じ、叶ふべくもあらざりしかば、急に勢を催し、後詰せよとて、楠次郎左衛門尉正儀、和田五郎正安を、忍びて河州に歸し給ふ。然るに和田正安、道より俄に病出して死しぬ。舎弟和田正兄は、痛手負ひぬ。正儀一人様々計略を巡らし、勢を催すと雖、吉野十八郷の者共も、左右に事を寄せて參らず。紀州には、安田、阿瀬川、芋瀬、中津川、和州には、越智十市、檜原が外は參らざれば、後詰せん事もなり難く、伊豫の土居得能が方へ急を告げ、九州の直冬の方へも、飛脚を馳せ、菊池が方へも使を馳せ、八幡へも、今十日待たせ給へ。後詰仕り候べしと、申送られしかども、其程過ぎぬれども、後詰の勢も來らざれば、今は城中忪へ難く、同五月十一日の夜、諸勢主上を供奉し參らせて、大和の方へ落ちて行く。主上も士卒に紛れさせ給はんが爲め、御鎧にて御馬に召されけるを、敵手繁く追懸けしかば、法勝寺左衛門督、取つて

後村上天  
皇賀名生  
に御遷幸



返し、防がる。四條從一位大納言隆資卿、六十一歳にて討死し給ふ。其外圓明院大納言三條中納言雅賢卿宰相中將實勝朝臣も討死せらる。翌十二日、南都の招提寺に入らせ給ひ、御茶を召上られ、其より三輪を過ぎさせ給ひ、宇陀の水分の宮に移らせ給ひ、辛うじて賀名生に落着かせ給ひけり。此時東國・北國の官軍等、豫て南帝の敕に依つて、八幡に力を合せんが爲め、美濃・尾張の邊まで馳着きける所に、八幡は早落城に及びぬる由聞えしかば、皆己が國々にぞ歸りける。此度討死し給ひし實勝朝臣の北の方の、歎きの程を傳へ聞くこそ哀れなれ。此人は洞院左衛門督實世卿の息女にて、心ばへ優しく、形の最も目出度く御坐しければ、君に奉らんと、深窓の中に冊き給ひけるを、宰相中將實勝、餘所ながら見初め給ひ、色々心を盡し給ひしかども、人目繁ければ、力なく過し給ひけるに、一年彌生ひとせの頃、高間山の櫻花を餘所ながら見給はんとて、實世卿女房達を伴ひ給ひ、高根の方へ、山路を傳ひ登らせ給ひ、人目なき所なれば、彼方此方と遊び歩き給ひけるに、實勝朝臣、豫て姫君の乳母と心を合せ、茂みに隠れ居給ひけるを、斯くとも知り給はで、乳母と共に、尾上

の方を詠めやらせ給ひ、高間の山の名もいちじるくこそあれ、花は只雲とのみ見ゆるは、心あてにやと戯れ給へるを、猶彼方よりは、能くこそ侍らめ、茂みを出で離れなば、岩切り通す吉野川も見えぬべしとて、此方へくと誘ふを、實勝朝臣つと出で給ひ、岩橋渡りして參らせん。此方へと搔負ひ給ひ、乳母と共に逃行き給ひけるを、知る人更になかりけり。斯くて姫君見えさせ給はぬといふ程こそあれ。大に驚き騒ぎ、手を分ちて、谷へもや落ちさせ給ひつると、方々を搜り求むれども、見出し參らせず。斯る深山には、天狗などの住むといへば、若しや取り參らせしと、谷峯残らず尋ねけれども、見え給はねば、實世卿も、泣々歸り給ひけり。其後實勝の許に居給ふ由聞えければ、實世卿大に怒り給ひ、君に訴へんと宣ひしかども、世上亂れたる最中なれば、只穩便にして坐せと諫めければ、力なく止み給ひけるに、程なく主上八幡へ行幸ありしかば、實勝朝臣も供奉せんと出立たれけるが、都も靜謐に及びなば、御迎ひに參りなんと、北の方を様々慰め給ひ、立出でんとし給へば、北の方、

何となく心に掛る白露の置き別れ行く袖のけしきを



と泣々聞えければ、實勝朝臣、

別路の露にはあらぬ嬉しさを頓て袂につゝみこそせめ

と打詠じて、立別れ給ひしかば、心も空に浮かれ、待詫びさせ給ひしに、此度八幡にて討たれ給ひしかば、絶え入る計りに泣き給ひ、黄昏時の覺束なきに、忍び出で給ひて、河音の幽なる方を心ざし、菜摘川の河淀の、月さへ疎き山陰の、岩の面に筆を染めて、

山陰の闇きやみ路に迷ひなん菜摘の川に身を沈めなば

と書付けて、身を投げ給ひけるに、家人共多く尋ね來り、敢なき形の、岩の狭間に掛り給へるを取上げ參らせしに、少し息の通ひ給ひければ、藥など用ひ、様々療養しけるに、人心出來にければ、皆々俱ひ歸りけるが、其後終に姿を替へ、佛道に入り給ひしぞ哀れなる。

### 南朝官軍寄京都事

爰に山名伊豆守時氏、同右衛門佐師氏父子、武家の政道を恨み、南方に屬して牒合せ、文和二年五月上旬、伯耆を立て、同六月二日、丹波の志守治に陣を取る。南方よりは、四條中納言隆俊、法性寺左衛門督康長を大將として、和田・楠・赤松・彈正少弼氏範以下の官軍を差上し給ふ。然るに去る八幡籠城の時、正儀の後詰延々に及びしを、諸卿いひ甲斐なく思はれければ、兎角支へ申す人々多かりし故、大和・河内・紀伊の勢は、隆俊・康長に屬すべし。泉州の勢は和田に屬せよ。和田又楠に屬すべからずと命せさせ給ふ。正儀の家子郎從大に怒り、故廷尉、先帝に仕へ奉られしより以來、今に至つて既に三代、忠功誰人か上に立たん。然るを恩賞こそなからめ、累代管領し給ふ國々を、召離れんは何事ぞや。速に奏聞を遂げ、天氣に依つて足利と和睦し、佞奸の公家原に思ひ知らせられ候へといへば、正儀涙を流し、旁が申す所理ながら、君の非を擧げんは、天の冥見も怖れあり。故判官殿金吾殿の、草の陰にて聞き給はん所も恥かし。君の政正しくば、怯弱の尊氏に天下を奪はれ給はんや。又父兄、豈討死し給はんや。正儀、君を傾けんと思は、足利を頼むまでもなく、大和・河



内・和泉・紀伊の内には、一日も足をためさず参らすまじ。其上正成・正行、不義の心あらば、是程取りよき天下を、などか奪ひ給はざらん。正儀苟も父が子なり。不義の行あらんには、末代の瑕瑾、父祖に不孝の罪遁るべからず。今國々を召上げらるる共、四ヶ國にある所の家子郎従を算へんに、河内半國に及ばんか。是れ莫大の御恩なり。譬ひ正儀が命を召さるゝとも、争か背き申すべきと宣へば、諸士忠心の程を感じ、皆涙をぞ流しける。斯くて同九日、官軍手を分つて洛中に亂入す。相公義詮は、東山に陣し給ふ。山名が勢は、七條より北を、大路切に打つて出る。二條大納言教忠卿、錦の旗を先立て進み給へば、四條法性寺和田・楠、二條より南を小路切に打つて出で、河原表にて追つ返しつ相戦ふ所に、京方は散々に戦ひ負け、坂本を指して敗北す。申の刻に及んで、土岐・長山以下が宿所を焼拂ふ。其後伴野出羽守が土御門・油小路の宅にも火を放つ。此日高武藏守師直が子武藏將監師詮・荻野尾張守・赤松妙善律師則祐、京方の加勢として上着しけるが、京方敗軍に及びしかば、西山に取登つて陣を取りけるが、如何思ひけん、同十一日、赤松は本國に引歸す。翌

義詮敗軍  
坂本に退

十二日、山名西山に押寄せて、攻戦ふ程に、師詮は自害し、阿保・荻野等は、丹波を指して落行きけり。

### 恩地正一遁世并尊氏卿父子歸洛の事

さる程に宰相中將義詮は、主上の供奉し参らせて、濃州垂井に落下り、皇居を守護し居給ひけり。官軍は、一戦に京都を攻落せしかども、馳來る勢もなし。斯る所に、同七月廿三日、赤松律師中國の勢を率し、攝津西宮に着き、國府に充滿せし由聞えしかば、楠正儀、敵に足をためさせては悪かりなんとて、京都を引拂ひ、國府に馳向はるれば、翌日、山名父子も京を立ちて、丹波路に懸り、本國に歸りしかば、翌廿五日、南方の官軍、悉く己が國々に引取りけり。爰に恩地左近太郎滿一が子に、源左衛門尉正一といふ者ありけるが、主人正儀に向ひ諫めけるは、殿は正成の御子、正行の弟君にて坐せば、下風を望み、餘光を慕ふ者多うして、既に五百騎の大將にて坐さずや。然れば此度の利に乗つて、足利を追討し給ひなば、大功一時に成就しぬと



覺え候ひしを、何となく在京し給ふ所に、義詮又多勢になり、既に上洛の由聞え候ひし。然る所に赤松、攝州まで着陣の由を聞き、早速歸陣し給ひしは、何事にて候ぞ。和田以下の宗徒の輩に、仰付けらるべき事ぞかし。正一之を察し候に、妻子の恩愛を思ばせ給ふが故ならずや。傳へ聞く故正成公は、先帝に頼まれ奉らせ給ひ、赤坂に籠らせ給ひしより、四海一統に及ぶまで、妻子に對面を許されずとこそ承り候へ。今殿は、正成・正行兩公の薰德に依つて、五百騎を従へ、諸侯の列に備はり給へば、只大功をこそ御心に懸けらるべき事なるに、色を重んじ給ふは、敗軍の機顯はれて、當家滅亡の基にて候はずやと、詞を盡して諫めけれども、許容の氣色なかりしかば、終に出家入道して、諸國修業の身とぞなりにける。是は正儀、其頃篠塚伊賀守が娘伊賀局に相馴れ、其離別を惜まれける故とかや。さる程に將軍尊氏卿は、東國に於て、新田の人々に打勝ち、上洛に赴き給ひしかば、義詮大に悦び給ひ、頓て京都に還幸なし奉るべしとて、父子共に供奉し參らせて、同九月廿一日、土御門の内裏に還幸なし奉らる。然る所に同晦日、西國の早馬來り、右兵衛佐直冬、南帝の

恩地正一  
遁世

綸旨を賜はり、山名と一つになつて、攻上らんと企てらるゝ旨を告げしかば、討手として、宰相中將殿を、播磨の國へぞ下されける。

### 楠正儀忠貞附渡邊九郎自害

#### 井足利右武衛入洛の事

然る所に越前の足利修理大夫高經・越中の桃井播磨守直常、山名が方へ飛脚を馳せ、急ぎ都へ攻上られ候へ。同時に京都を攻落し候べしと告げければ、直冬山名時山大に悦び、文和三年十二月、七千餘騎にて攻上らる。將軍此由を聞召し、宗徒の勢は、義詮に附けて播州に下し置きぬ。味方小勢にて京にあらんに、又西國・北國の敵に牒じ合せ、楠攻上りなば、由々しき大事ならん。傳へ聞く所は、南方の諸卿に讒せられ、正儀恨を含む由。然れば楠味方になりなば、攝津・河内・和泉・大和・紀伊五ヶ國の守護國司職を宛行はゞ、味方に降る事もやあらん。然らば後代までの能き便といひ、南帝をも取り奉らんと思ふなりとて、天龍寺の應藏主とて、辯舌利口の僧のあ



りけるを、河内にぞ下されける。此僧は、正儀の郎等渡邊九郎が母の甥なりける故、九郎を以て、丹下志貴等を語らひしかば、丹下志貴同心して、此事を恩地に語る。恩地又和田の人々に、斯くと語りければ、和田が老臣寺刑部大輔、是こそ天の與にて候へ。逆も聖運開かるべくもなしといへば、此議に同じて、正儀の乳人馬木右近に語るに、右近も是に同じぬ。凡六十餘人、皆是に同じければ、さらば金吾殿に申すべしとて、和田恩地志貴丹下四人、正儀の前に出で、斯くといひて、足利家の御教書を見せければ、正儀涙を流し、故正成正行の遺言を汝等は知らざるや。某は父の顔をだに覚えざれども、旁が親の常に語りし所なり。當家の存亡は、王法と共にすべし。是父兄の遺言なり、誰か當家の輩に、父兄の恩を受けざる人やある。不忠不義の至り、是より大なるはあるべからず。汝等身を立てんと思はば、先づ正儀が首を切つて、京都の獄門にかけて後、思ふまゝに恩賞に預るべし。京都の使者何處にかある。搦め取つて、芳野殿へ參らせんと、氣色變つて見えければ、四人は赤面して詞なく、面々の宿所にぞ歸りける。其後馬木を招き、如何なれば彼使僧を、此方へ

は渡さぬぞ。御邊も朝敵なるかと怒らるれば、馬木右近大に怖れ、宿所に歸つて、一味の輩と評定しけるが、金吾殿の、君を思召す如く、我々も亦楠殿を思ふが故にこそ、此企にも及びつれ。此上は大將の仰に従ふべしとて、彼僧を搦め出し、六十餘人の者共も、太刀を帶せず、囚人の如くにして、客殿の庭に列居て、重科と思召さば、如何やうとも罪せさせ給ふべしとぞ申しける。正儀見給ひ、旁斯く悪事を思立ち給ふこそ、當家の滅亡、朝家の御大事なれ。其源は渡邊九郎より事興れり。斯く大勢に知らせずとも、某に密に知らせざるぞ。正儀に對し、隱謀はあるまじけれども、朝廷に對し、逆心を企てぬれば、不祥ながら切腹せらるべしとて、渡邊に腹を切らせ、其首と彼僧とを、芳野殿へ差上げられければ、代々の忠臣かなと、大に叡感なされ、大將の任は暫く、河内守護國司職の事は本の如くたるべしと敕誼あつて、彼僧を都へ返すべしとて、楠に下されけり。是に依つて正儀、彼僧を京都に追返されければ、尊氏卿、代々智仁勇の三徳を兼ねたる武士かなとぞ、感じ給ひける。是に依つて尊氏卿、如何ともし給ふべき術なく、同廿四日太平記に、正月十二日に作るは非なり主上を取り奉り、江



州武佐寺に落ち給ふ。斯くて其年も暮れしかば、文和四年正月十日、尾張修理大夫高經・桃井播磨守直常、北國の勢を率ゐて入洛せらるれば、同廿二日、左兵衛佐直冬、山名伊豆守時氏と共に、丹波路を経て入洛し給ひ、大内の舊跡大極殿の額門の跡に、敷皮布きて坐し給ひ、鎧弓征矢をば龍崎に持たせられ、我身は黒革の腹巻に夷弓持ちて、草鞋に差單皮を着せられければ、見物の京童部共、天下の武將にはなり難き出立かなと、憚る所なく笑ひけるとぞ聞えし。

### 南方諸將軍評定の事

さる程に尊氏卿は、三萬餘騎になり給ひしかば、同二月四日、東坂本に着き給へり。相公義詮も、七千餘騎にて、同日の早旦に、山崎の西神南の北なる峯に陣し給ふ。都には直冬を大將として、尾張・桃井以下の勢、七條より九條までの、小路々々に充満みちみたり。一手は、山名伊豆守時氏父子を大將にて、伊田・波多野以下の者共、淀・鳥羽・赤井・大渡に陣を取る。河より南には、四條中納言隆俊・法性寺左兵衛督康長を大將に

て、和田・楠吉良・石室・赤松氏範以下、八幡山下に陣しけり。然る所に山名父子、南方の兩大將へ軍使を立て、敵多勢ならば、待つて戦はんと存せしに、小勢にて候由。此方より打散らし候はん。然らば御勢を、川より此方へ渡され候へ。一手になり候はんといひ送らる。兩將此儀尤なりとて、川を渡し、山名と一手になり給ふ。其後諸卿會合して評定あり、楠正儀進み出で、見る所は、敵兵六千計りと見えて候。是程に小勢なるべしとは思はれず候。定めて一萬二三千は候べし。察するに、乾の方の谷々に隠し勢ありと見えて候。あれ程の小勢にて、佐々木入道・妙善律師・細川頼之などの武功の者共、何ぞ斯く近々と陣せんや。又隠し勢なく候共、峯嶮しくして上るべき便なければ、西北の尾崎より、弓の兵降下つて、下り拳に射て漂ふ所を、眞倒に駈落し候はんに、味方恠へ候まじ。妙善律師當國にて、此術にて數度勝利を得たりと承る。一度利を得たる謀は、度々する者にて候ぞ。然れば此方より寄せんは、危き合戦にて候べし。只日毎に足輕を出し、敵の分限を見計らひ、偽引寄せて一戦をせられ候へかすと宣へば、山名伊豆守時氏大に感心し、扱て若年なりと申せ



共、故廷尉の息程候ひけり。日本を敵にうけ、數年南方の國々を、安穩に治め給ふこそ理なれと申されけるに、子息右衛門佐師氏進み出で、道譽則祐が術も、能知り賺し候ものを、楠殿は御身に引當て、敵を深み給ふぞや。其上大將相公は、大臆病の人にて候なり。楠殿は御存候まじと申さるれば、諸將皆此儀に同じ、只寄せて雌雄を一時に決し候はんと勇みし故、四條法性寺兩大將も、事は多分に隨ふべしと同せられければ、正儀眉を擧め、又此度の合戦も、抄々しからじとぞ咄かれける。

南朝太平記卷第二十終

南朝太平記卷第廿一

正平十年二月合戦の事

さる程に神南の陣には、西の尾崎を、佐々木赤松等が手の者共堅めたり。南の尾崎は、細川右馬頭頼之以下陣を取る。北の岸には、大將宰相中將義詮朝臣、本陣を居ゑらる。斯る所に山名右衛門佐師氏、西の尾崎へ押上りて、敵味方入亂れ、爰を詮と相戦ふ。南の尾崎右馬頭頼之の陣へは、和田楠以下、二千餘騎にて進んだり。後陣は山名伊豆守時氏、四千餘騎にて續いたり。楠は壘楯を手にて持たせられたれば、敵、雨の降る如く射けれども、事共せず攻寄する。豫て足輕共、熊手を持たせれば、鹿垣を一時に引破る。是を見て秋間須々木以下の究竟の者共、火水になれと戦ひしかば、正儀の先陣三百餘騎、色めき立ちて逃退く。正儀少しも騒がず、旗本の勢



を魚鱗に立て、靜々と討つて懸り、無二無三に切入れば、頼之の勢怵へ兼ね、崩れ立つ所を、山名が執事小林民部丞、得たり賢しと士卒を下知し、喚き叫んで攻立しかば、悉く谷底へ捲り落され、死傷する者數を知らず。小林は氣に乗りて、曳々聲を揚げて追懸くる。楠は、始めの細川が陣に打上つて、菊水の旗打立て、先の敗軍の勢を集めらる。右衛門佐師氏是を見て、懸れくと下知しければ、逸雄の若者共、震々雷々として戦ふ程に、佐々木赤松が陣も崩れ立ちしかば、相公の陣も、纔百騎計になりける。されども正儀の察せられし如く、細川右馬頭・同陸奥守を大將にて、六千餘騎を、深谷の内に隠し置かれけり。正儀、山名が陣へ使者を馳せ、義詮が陣を見候に、佐々木赤木・細川の者共と見えて候。荒手の敵に懸り給はんは如何に候。以前の敵を追立て、其勢に御懸り候はんは格別、是程の敗軍に、本陣の能く靜まりて候は、いかさま頼む術や候らん。今暫く御待あつて、敵の術を御覽候へといひ送られければ、師氏聞きて、一陣破れて殘黨全からずといへり。況や早兩陣の大備、既に敗れ候上は、勝利掌の中に候と、事可笑しげに返事して、士卒を従へ打つて懸る。義

詮、今は叶はじと思はれけん。馬に打乗り、落方を求め給ふ所に、赤松則祐走り寄り、七寸を控へて、こは何事の候ぞ。則祐討死仕りて後こそ、左様の御態は候べけれど、諫め申して後、帷幕を颯と打上げて、いひ甲斐なき者共かな。大將の御前にて潔く討死せよ。死ねや死ねと、身を揉んで下知せらるれば、我もくと切りて、今日限りと相戦ふ。其外谷を隔て、一陣に控へたる平位新左衛門・櫛橋三郎左衛門・浦上七郎兵衛等、横合に切懸る。山名が勢、手繁く荒手に切立てられ、少し漂ふ所に、細川が隠し勢、漸く戰場に馳着きて、太山も崩れ天維も落ちよと喚き叫び、一舉に死を争ひしかば、山名が勢咄と崩れて敗走す。左衛門佐師氏は、小林民部丞・舎弟五郎が跡に控へたるを討たせじと、取て返して戦はれけるに、佐々木が郎等目鹿田左衛門馳寄せて、師氏の内兜を目蒐けて丁と切れば、左の眼を、小耳の根へ切付け、目昏み膽消えけれども、太刀を取直し、目鹿田が涎掛の透間へ、鋒を入るゝとぞ見えし。目鹿田は急所を突かれて死したりけり。山名は太刀を倒に杖きて、少し心を休めんとせられけるに、敵の射る矢五筋まで、馬に中つて百と伏せば、師氏馬より下立た



れたるに、又矢一つ來つて、兩眼の間を、後の纒附の本へ、矢先白く射付けたり。

### 河村彈正賴秀最後并楠正儀退口高名の事

師氏今は怵ふべくもあらざれば、自害せんとせられける所に、河村彈正走り來り、師氏を己が馬に搔乘せ、福間三郎左衛門が、彼方に休み居たるを招き、馬の口を取らせ、鞭をしと當てければ、馬は勇んで馳せて行く。河村爰を引きなば、大將遁れ給はじと取て返し、大音揚げ、山名殿に一騎當千と頼まれつる河村彈正賴秀ぞ。寄れや者共といふまゝに、三尺六寸の梅華皮かいらぎ作りの太刀を打振りて、射向の袖に差翳し、一方は山の岸、一方は谷にて、九折なる嶮岨に、濃紅の纒懸けて、只一騎控へたれば、勇み進んだる若者共、四五十騎懸り向ふ。河村千鳥足を踏んで、散々に相戦ひ、敵三騎切て落し、四人に手を負はせけるが、我身も痛手数ヶ所負ひて、終に討死をぞしたりける。細川右馬頭は、六千餘騎の隠し勢を、二千餘騎引分けて楠に對し、麓に陣を張らせ、一千餘騎は備を亂して、山名が勢を追はしめ、三千餘騎は備を堅うし、賴之下

細川賴之  
敗走

知して靜々と進まれければ、南方の兩大將四條中納言・法性寺左兵衛督、一戦にも及ばず落行かる。正儀之を見給ひ、怯弱なる公家の人々の舉動かな。斯様の敗軍の時、生きんと思へば死し、死なんと思へば生くるものぞ。細川が勢を打散らさずんば、味方一人も、争か安穩なるべきや。和田殿先陣して討死と思ひ定め、一戦を遂げられよと仰あれば、和田、仰にや及ぶ。あの敵打破りて捨て候はんと、三百餘騎を魚鱗に立て、靜かに懸り向へば、楠正儀、五百餘騎を一手になして續かる。勝誇つたる細川が勢、なかは以て怵ふべき。杉形になつて走り向ふ。和田が勢、物馴れたる者共なれば、敵間近くなるや否、面々に楯をかばと捨て、咄と喚いて駆けたりけるに、細川が勢騒ぎ立ちて、右往左往に敗北す。正儀は、逃ぐる敵を和田に追はせ、五百餘騎を魚鱗に立て、靜々と引かれけるを、敵兵多く附慕ふ。正儀下知して、あれ體の取集め勢を討たんとすれば、味方の備亂れて、不覺の死をするものぞ。近付かば射て落せよと下知して、和田が後陣に打たれけるが、敵は南方の兩將、又は山名を追つて川邊を上りに進みければ、今は河の渡には、然々の兵もなし。然れども敵急



に追來れば、正儀、川の瀬より下し、下の方に勢を備へ、馬武者を百騎計残し置き、是に精兵の射手百餘人附置きて、其餘の勢は、靜に川を渡させける。敵手繁く追懸くるを、百餘人の弓の者共、差詰め引詰め散々に射る。射られて漂ふ所を、百餘騎の逞兵等、眞驀に駈立てしかば、蜘蛛の子を散らすが如く、四角八方に逃散りたり。此勢三百餘騎の者共、靜に河を渡しければ、一人も討たるゝ者なく、安々と引いて行く。敵も味方も之を見て、正儀の智勇の程をぞ感じける。

### 正儀詐被乞和事

さる程に神南の軍に、東方打勝ちしかば、將軍尊氏卿は、山門より東山に陣を寄せ給へば、仁木左京大夫賴章は、嵐山に取り上る。義詮は神南を動かすして陣し給ふ。官軍は又本の如く、直冬を大將にて、東寺・淀・鳥羽・大渡みらくに充満たり。斯くて日毎に相戦ふと雖、合戦は互角なり。時に同二月廿一日の朝、楠正儀は、八幡より兩使を以て、直冬の陣へいひ送られるは、某忍を以て、東山の陣を見せ候に、用心淺間に

候由、一夜討なされ候へ。案内者の兵二百人參らせ候はん。又忍びの兵百餘人、豫て敵陣に入れ置き候はん。渠等其時陣々に火をかけ、五騎十騎づつ切廻らば、勝利を得候はんとなり。直冬悦び、桃井直常を招き、此事を語り給ふ。直常使者に對面し、然らば某が勢を以て、阿彌陀峯、嵐山の敵に懸らせ、某は、將軍の陣に切入り候べし。其餘の陣々へは、高經父子が勢を差向けられ候へ。勝利疑候まじといふ。其より足利高經に談し給ふに、高經承引せず。其故は、直常には先に内談あつて、高經を外様になし給ふといひ、直常計り宗徒の請手となり、高經を末々の敵に當つべきやうやあると、之を憤りしが故に、此事も止みにけり。是に依りて正儀、南方の總大將の陣に行き、此間敵は日々に勢重なり、味方は次第に減じ候。此分にては、始終如何候らん。さるに依つて、東山の陣へ一術なされ候へと、數度申候へ共、東寺の諸將、和せざるが故に事ならず候。所詮義詮が陣へ一夜討して、聖運の程を試み候はんと申さるゝ。法性寺左兵衛督康長聞き給ひ、正儀の申條尤には候へども、直常・高經・師氏は、當世無雙の良將なり。此輩同心なきは、定めて上策にてはあるまじと



存候と宣へば、楠聞きて、渠等を良將と仰せ候や。此度神南にて懸るべき圖を脱し、駈けまじき所を駈けて、味方の負を仕出され候。某が申す所不審に思召れ候は、今見給へ。義詮を追散らして見せ候はんと申さるれば、康長も怒れる氣色にて、兎角の詞も出されず。正儀も不興氣にてぞ立たれける。斯くて正儀は、赤松が山崎の陣所に使を遣はし、忍びやかにいひ送られけるは、當家二代、君の爲に命を捨て、正儀又忠貞に私なしと申せども、朝に佞人あつて、讒を專と仕るに依り、領國を召放たれ、面目を失ひ候事、定めて聞き及び給ふべし。當時攝津・河内・和泉・紀伊・淡路に四國を給はらば、將軍家に參り、忠戦を勵み候はんとなり。赤松信濃守大に悦び、御教書を申受けんは安かるべけれども、四國は細川の領國なれば、如何あらんとて、頼之に斯く談じ給ふに、其こそ泰平の基なれば、四國を去り、渡し候はんとて、兩人相公に申さるれば、先づ將軍に伺ひ申すべしとて、東山の御陣へ申送らる。將軍大に悦び給ひ、頓て御教書をぞ給はりける。其後楠、使者を以て、南方の官軍を討取り、直に芳野の内裡へ押寄せ候はんと申送らる。神南山崎の人々は、楠をこそ怖

正儀詐つて降を乞ふ

しく思ひしに、味方になりたる故、夜も安く寝らるれ、目出たしとぞ悦ばれける。

### 正儀夜討の事

正儀は斯く謀り課せて後、板持・早風・富田・林・村雲・生駒・小鷹・新庄・早飛以下、奇妙の忍十四人、其外忍に馴れたる兵三百餘人、五人六人一與にして、神南・山崎の陣々へ、宵より忍ばせ置かれけり。斯くて同三月五日、神南へは和田・丹下・志貴七百餘騎、櫻井の佐々木道譽が陣へは、早瀬・安間・志宇智六百餘騎、山崎へは湯淺・富田四百餘騎、後陣は正儀六百餘騎、何れも合詞合印を定め、卯の上刻に押寄する。陣を三隊に分けて、先陣は忍ばれん程は忍んで、敵の陣中に入れとなり。富田は百五十騎にて、頼之の陣財寺へ押寄せければ、湯淺は後陣に控へたり。三宅は山崎の在家に引入りて、財寺の合圖を待つ所に、先に入置きたる忍び共、財寺の在家に火をかけて、鬨を咄と揚げければ、富田百五十騎を前後に立て、無二無三に切つて入る。敵兵共火に驚き、鬨の聲に狼狽へて、我先にと逃げて行く。細川右馬頭頼之は、將軍方にて、良



將の譽ありしかども、主従三騎赤裸にて、太刀計り取つて、水無瀬を指して落行か  
る。財寺の火を見て、山崎の在家に紛れ居たる忍び共、三ヶ所に火を掛けて、此に顯  
れ彼に隠れ、不意に起つて切廻れば、赤松が勢も、皆赤裸にて北げて行く。櫻井神南  
の陣へも、豫て入れ置きたる忍び共、方々に火を放てば、寢そびれたる敵兵共、先後  
に迷へ度を失ひ、右往左往に北げて行く。大將相公も、暫は行方知れ給はざりける  
が、兵庫に落着き給ふ。其日討取る首數、千三百餘級・生捕百三十七人なり。南方の  
兩將を始め、山名以下の諸將、こは何事ぞと驚きけれども、仔細を知らざればとて、  
勢を一騎も出さざりけるが、楠夜討したりと聞えしかば、翌六日の辰の刻、兩將三  
千騎を率し、河を渡して山崎に馳着くる。暫くあれば山名父子も、西岡の敵を追拂  
うて、是も山崎に馳來る。斯くて南方の兩將及び山名・正儀の陣へ軍使を馳せ、當時  
無雙の計略、驚入候と賀せらるゝ。正儀は、敵の集め置きたる兵糧少々運び取り給  
ふ。午の刻より兩大將、山崎・神南・櫻井等の敵陣の兵糧を、諸軍勢に配當せらる。正  
儀は、巳の刻に山崎を立ちて、三千餘騎にて、酉の刻に、八幡の陣に歸らるゝ。山名が

執事小林民部、七百餘騎にて、財寺に陣すれば、兩將は其日に、本の陣所に引返し給  
ふ。正儀は、終に兩大將山名に對面せられず、兩將の方へ使を以て、斯く勝つべき圖  
の候を知り給はず候。以來御心得候べしといひ送らる。康長聞き給ひ、此度の働き、  
實に以て名譽に候。但某に知らせ給はざるは、楠殿も不覺候と宣ふ。使者丹下兵三  
郎、仰に候へども、正儀先日此謀を申入候へ共、山名・桃井は、當世の良將たりなどと  
仰せられ、此圖を見付け給はぬ大將達在す故、正儀が一孤の勢を以て、忠義に備へ  
んと思ふなり。諸勢心を一致せば、義詮を討取らん事案の内にありと、郎從共に向  
ひ語り候ひきといへば、兩將兎角の詞なく、面を赤めて居られけり。尊氏卿は、東山  
より、神南・山崎の煙を見給ひて、又例の楠奴に、謀られつると覺えたり。狐の子は  
顔白とやらん、渠に度々化さるゝこそ安からねと宣ふ。既に陣々震動して、敗北せ  
んとしたりしを、土岐・仁木以下馳廻つて鎮めける。此時東寺より押寄せなば、尊氏  
又敗北し給ふべきを、諸將和せざるが故に、長詮議にて止みにけり。楠又東寺の諸  
將と山名が陣に使を馳せ、義詮が行末、何處にありとも聞えず候。後は攝州にて赤



松が國なれば、五日過ぎなば、敵蘇<sup>よみがへ</sup>り候はん。哀れ臆病神の覺らぬ前に、諸將心を一つにし、東山の敵を追拂はれ候へといひ送らる。然れ共高經直常不和にして、大將の下知を用ひざれば、直冬何ともいひ出さるゝ事もなし。山名は、楠に敵を拂はれ、餘りに無念に思ひ、軍評定の爲、三度まで東寺の陣に至りけれども、高經出會ひば直常出でず。直常出づれば高經出でず。是に依つて山名も頭を搔き、怒を押へてぞ止まれける。義詮は只七騎にて、兵庫に着き給ひしが、程なく多勢になり給ふ。小林之を聞きて、本の西岡に退けば、義詮は又、本の神南にぞ陣し給ひける。

官軍退散國々附正儀被送高經直常事

同十二日、尾張修理大夫高經・仁木・細川・土岐・佐々木以下と戦ひしが、戒光寺を敵に取られ、東寺の勢は、氣を屈し勢を吞まれ、城戸より外へ出でざりけり。然るに今日太平記に、十三日に作るは非なり、十二日なり直常高經を助けざるは、直常敵に内應し、明日東山の勢を引入るなんと、誰れいふともなく風聞しければ、大將直冬高經以下の人々、淀鳥羽の官

軍にも知らせず、住吉天王寺を指してぞ落ちられける。直常之を聞き、是又能き謀の種なるべしと、東寺の陣に火を放てば、敵兵、すは東寺は落ちたるぞと、雲霞の如く馳せ來るを、此彼より駈出でく、敵少々討取りしかば、悉く逃げ行きけり。翌十三日の早旦、直常鳥羽まで引きしかども、味方は早一人もなかりしかば、又八幡まで引返し、正儀に對面せしに、早兩大將は落ちられぬと語らるれば、哀れ大臆病の人人かな。直冬も、今よりは臆冬と名乗られよとぞ笑はれける。斯くて數日經て、同十七日、南方の兩將及び直冬以下、八幡山に上らるゝ。面目なくぞ見えし。諸將異心なき旨和睦あつて、翌日合戦の評定あり。異儀區々なりければ、神慮に任すべしとて、神託を窺はれけるに、直冬、父に向つて弓を引く事、諸神の惡み給ふ所なれば、勝利を得る事あるべからざる旨、神託灼に下りければ、諸卒の心忽に變り果て、山名・桃井・尾張以下に至るまで、重ねて大將を給はつてこそ上らめとて、山名は丹波路に掛つて本國に歸り、直冬は堺浦より船に乗じ、備後へ歸陣し給ひけり。修理大夫高經は、丹波より若狹に廻つて歸らんと宣ひけるを、直常、某に於ては、尊氏が陣下を



通るべし。敵出合は、願ふ所の幸なり。十死一生の合戦をすべしと申さるれば、高経も是に同じ給ふ。楠正儀、さらば某、京まで送り参らせんとて、六千餘騎を本陣になして、七條河原に充満たくみたり。高経は先陣として、六千餘騎を七つに分つ。後陣は直常八千餘騎を九つに分け、河原を上りに、粟田口より、山科に懸つて押通らる。東山の陣には、敵又如何なる術をかなすらんと、周章騒ぐもあり。いやしく北國へ引退くぞといふもあり。只兵を、一騎も出すべからずとて、堅く制し給ひける故、矢一つをも射ず、のさくくと通しければ、楠は河原を下りに、八幡に引返さる。兩大將も、三千餘騎にて淀へ打つて出で、正儀を待付けて、其日は八幡に陣し給ひ、翌日南方へ引返し給ひけり。是に依つて同廿二日、將軍父子歸洛あつて、尊氏卿は、藤原爲定卿の宅に入り給へば、義詮は、宣明卿の宅に移り給ひ、同廿八日、主上を山門より、土御門の内裡に還幸なし奉られけり。

南帝臨幸觀心寺井和田・楠軍評定の事

足利尊氏  
死去

さる程に足利直冬、東寺没落の後、南方の官軍等、飯盛渡邊を限つて宮方の領とし、折々野伏共出合ひく、戦ひたる計にて、さまでの合戦もなかりし所に、延文三年四月廿九日、尊氏卿御年五十九歳太平記に五十四にて逝去ありしかば、嫡子宰相中將に作るは非なりに逝去ありしかば、嫡子宰相中將義詮朝臣相續いで、征夷大將軍の宣下を蒙り給ふ。此弊に乗つて、南朝の官軍京都を攻めんと企てけれども、勢微にして叶はず。力なく止みける所に、結句鎌倉管領足利左馬頭基氏義詮弟の執事畠山太夫入道道誓、基氏の名代として、南朝退治の爲、延文四年南朝正平十四年十一月六日の申の刻、多勢を率ゐて上洛し、直に將軍家の御所に参じ、義詮朝臣に謁しければ、御悦び限りなく、御盃を下さる。同十四日には、畠山が宅に將軍を招請し参らせて、善盡し美盡し、様々と響應す。將軍も自ら南方に進發し給ふとて、其用意頻りなり。其頃南帝は、河内の天野を皇居にて御坐ありける所に、楠左馬頭正儀、和田和泉守正武参内し、此處は要害無下に淺間に候へばとて、天野の奥觀心寺に行幸なし奉る。斯くて正儀一族、諸臣を集めて合戦の評定あり。正儀宣ひけるは、此度は赤坂を始め城々を焼拂ひ、和泉河内の寺社の禰宜法師人民まで、

後村上天下  
皇觀心寺  
に御臨幸



悉く紀州・和州の方へ落し置き、千劔破一城に籠るべし。和田殿は岸和田の城を焼拂ひ、紀州の鹽谷伊勢守と一手となり、紀伊川を前に當て、防がれ候へ。某は籠泉・石川へ打出で戦ひ候べし。然らば東國勢、百日とも在陣叶ひ難かるべしと申さる。和田正武進み出で、某はさは存せず。始終は兎もあれ角もあれ、初度の勝利こそ快く、諸人も勇む者に候へ。紀州の勢を給はつて、正武渡邊に罷向ひ、一軍仕り候はん。數ヶ所の城を御開き候はんも、餘り穩便に候と申さる。正儀聞き給ひ、兄正行、先年東條にて戦ひしは、討死を期しての事、多勢に微勢、替る術もなくては、如何なりと制せらる。其時恩地・橋本詞を揃へ、泉州の仰も、勇の過ぎたるとや申さん。又城々を明けんも、餘り穩便に候といへば、然らば兎も角も計らはれよ。今見よ、城を攻落され、人を損する上に、兵糧も敵のものとなるべけれどぞ立たれける。

丹下・志貴・湯淺・俣野等出降人附金剛山軍の事

斯くて新將軍義詮朝臣、南方進發に依つて、同十二月十九日、内裏より頭左中將忠

光朝臣を以て、御旗御馬を下さる。翌廿日の寅の刻、御供の勢二千騎計りにて立ち給ふ。甲冑弓箭を帶せらる。一兩日東寺に逗留あつて、同廿三日に、尼崎に向ひ給へば、翌日畠山以下の東國勢數十萬騎南方に發向し、河内の國に亂入し、山野を餘さず陣を取る。楠は豫て忍びの者共を、敵陣に入れ置かれける所に、走り歸つて申しけるは、畠山が陣は、津々山の南の尾崎に陣を取りて候が、畠山こそ用心嚴しく候へ。其餘の大名は、多勢を頼み、用心の體も候はず。其上飯盛の寄手、今日飯盛に着きて候が、十餘里を一日に打つて候故、大に疲れて見え候と告げければ、丹下志貴大に悦び、今宵夜討に仕り候は、小勢を以て大勢を追散らし候はんといふ。正儀、いやしく、百日の中には追拂ふべき敵を、危き戦をして何かせんとして許されず。丹下志貴・譽田・俣野以下大に怒り、いひ甲斐なき人を、大將と頼みぬるこそ口惜しけれ。謀略を以て、敵を引入るべけれども、其は逆罪なればとて、六百餘人にて、降人にぞ出でにける。其後程經て、譽田・湯淺が方より、恩地が方へ使を以て忍びやかにいひけるは、此度寄手に降りぬる事、思へば不義不忠の至り、千悔すといへども



是非に及ばず候。就いては今夜細川相模守清氏を大將にて、我々兩人案内仕り、觀心寺に押寄せ候。急ぎ切所に勢を遣はされ、我々共を討取り給ふべしとぞいひ送りける。恩地、正儀に斯くと語りければ、いやしく、渠等が心中計り難し。敵に與する不覺人共が、我に忠を存すべきや。當地の兵を他所へ出して、是に寄せんと巧にや。さりとて差置くべきにあらずとて、恩地、安間を觀心寺へぞ向けられける。安間は、觀心寺のあなた、金剛山の高き岸に兵を伏せて備ふれば、恩地は十町計麓の茂林に勢を隠し、一千餘騎にて控へたり。案の如く、其夜細川相模守、士卒を皆歩立になし、さしも嶮しき金剛山へぞ登られける。安間は是を見て、時分は能きぞと下知すれば、士卒等一同に鬨を咄と作り、下り拳に散々に射る。豫て心得たる事なれば、十分に逃散りて、行方知れず落失せけり。細川が勢、駈上らんとするに、盤石銳すゑに、岸高くして上り得ず。弓手の方は深谷なり、細き道に沓の子を打ちたる如く、群り立ちて押合ひたるに、敵の射る矢は、さながら白雨の足の如し。寄手三千餘騎の勢なれば、先の難儀なるをも知らず、矢叫びの聲を聞き、曳やくと進む程に、先陣の四

百餘騎、一度に谷へ押落され、殘少なになりにけり。清氏眼を瞋らし長刀を取つて、進み懸る味方に向ひ、敵難所を取つて、先驅既に多く命を損ず。汝味方深谷に落つるをも知らず、進み懸るは何事ぞ。己等こそ差當りたる敵なりとて、先に進める者共三人まで、長刀に刺貫き、谷へ投捨て、齒を切つて立たれければ、漸々其時靜まりけり。斯くて清氏、後陣の河原が方へ軍使を走らし、此由をいひ送り、案内者共は、討たれしや落行きしや、行方を知らざれば、進退途を失へり。如何はせんと、使者往返の程を待つ所に、恩地、思ひも寄らざる後より、後陣の勢へ、咄と叫んで切懸くれば、一戦にも及ばず、弓手の谷へ駈落され、上が上に重なり死す。たましく死に残りたる者共も、皆赤裸にて、翌日すごとくと逃げ歸る。見苦しかりし分野ありさまなり。清氏も大勢に取籠められ、痛手ニヶ所負ひながら、辛き命を助り、主従二騎にてぞ落ちられける。翌日譽田・湯淺二人、太夫入道道誓に向ひ、味方に野心の者あつて、謀を敵に泄らしつると覺え候といへば、入道、さればとよ、先年石川河原に對城を構へ、楠と數日戦ひしに、味方の術を皆敵に知られ、悉く今度の如く仕損じてありつ



るなり。何として聞え候や。旁能く知られつらん。語られよといへば、湯淺それこそ深き様子の候。楠が陣へ夜討などは、思ひも寄らず候とて、夜廻りの油断なき次第、雁番の様子を語りける。是は正儀、父兄に替つて、少し油断ありし故、千劔破へ夜討に寄せせしが爲なりけり。

南朝太平記卷第廿一終

南朝太平記卷第廿二

楠正儀津々山へ夜討の事

さる程に志貴・丹下・湯淺以下、敵方にありながら、様々謀を巡らしけるが、時分よくなりぬ。夜討に寄せらるべしといひ送りしかども、一旦敵になりたる者なればとて、正儀、是を用ひられず。和田も恩地も諫め兼ねて、斯く圖に當りたる軍を怖れ、人を疑ひ給ふぞやとて、七人の降人の陣々へ、五人六人あて勇士を差遣し、渠等が傍を離れず居て、不義あらば刺違へよとぞ下知しけるに、七人の者共此由を聞き、左様に疑ふまじき所を、深く疑ひ給ふ大將にて候。殊に不義ある我々にて候へば、御疑尤に候。然らば我々の手の者共を、十人二十人一與にして、合詞を定め、畠山が陣へ忍ばせ置き候べし。究竟の兵五百人計り、差遣され候へ。其勢と交り、陣々へ切



入り候べしといひ送れば、恩地大に悦び、正儀に斯くといふに、心得ぬ事なれ。若偽つて味方を方便り討ちなば如何せん。質を渡さずんば、叶ふまじと申されければ、恩地又斯くと返事するに、七人の者共、皆子供又弟などを質としてぞ出しける。斯くて合圖の夜になりしかば、和田・恩地・安間・高安三千八百餘騎を四つに分くる。次は大將左典厩正儀、七百餘騎を一隊となし向はる。先鋒の和田・恩地、畠山太夫入道が、張番の者共を追立て、逃ぐる敵に追縋つて、透間もなく敵陣に切つて入る。安間・高安、一聲鬨を咄と作れば、後の山に隠れ居たる野伏七百餘人、同音に鬨を合す。寄手の勢、やれ夜討よと狼狽へ廻り、太刀よ松明よと轟く所に、豫て入れ置きたる忍びの兵、方々に火をかけて、此に顯はれ彼に隠れ、喚き叫んで切廻る。志貴・丹下七人の者共、七つに分れ、手勢を従へ所々に切入れば、數萬の敵軍、何と思ひ分けたる心もなく、只百千の雷の、一度に鳴落ちたるやうに覺え、太刀をも取らず、赤裸にて裸馬に乗りて逃ぐるもあり。弓にて切合ふ者もあり。遊佐安藝守・佐原將監・内山小太郎を始め、一騎當千の者共討死す。其間に太夫入道は、甲斐なき命を助かり、這

這逃延び、其夜は久法寺にぞ落着きける。七人の者共、正儀に對面し、此間の罪を謝す。恩地は道誓があらん所まで押寄せて、討取り候はんといひけれども、典厩是を許されず、哀れ翌日寄せたらましかば、敵足はためまじかりつるに、圖を外されけるこそ方見けれ。四五日經しかば、敗軍の勢集まつて、又元の如く寄手多勢にぞなりにける。

### 正儀計略附千劔破攻の事

斯くて寄手の勢は、手負死人出來ると雖、多勢なれば事共せず、龍泉寺平岩ニヶ所の城を攻落し、赤坂の城を十重廿重に取圍む。和田和泉守城中より忍び出で、不意に夜討を懸くると雖、敵陣敢て退かざれば、和田・楠諸共に、其夜赤坂の城に火をかけて、千劔破の城へぞ引籠られける。其後正儀謀を巡らし、丹下・安間・志貴・早瀬等に心を合せ、寄手の中へいはせけるは、故廷尉正成、一度先帝に頼まれ奉りしより以來、將軍家に對し奉り、少しも遺恨なしと雖、忠義を専ら存するに依つて、數年怨



敵となつて候。併當家の不義とは、誰が申すべきなれば、今の義の誠あるを感じさせ給は、老臣等正儀に諫言を仕り、武家へ對して、忠戰を勵ますべきにて候。此儀、主人正儀には未だ知らせず候へども、仰に依つて申聞かすべく候と、實しやかに申し遣しけれども、又謀にやいふらんと、承引の氣色はなかりけり。是に依つて重ねて申入れけるは、疑はせ給ふは理にては候へども、今は國中の城々、悉く退失仕り候ひぬ。其上紀州・和州にも、敵發り候ひぬ。加之將軍家を敵に受く正儀にて候へばこそ、今まで斯く安穩に候へ。然りとて千劔破の城を攻落されんには、唐土天竺が寄せ來りたりとも、一年二年には、争か叶ひ候べき。然れども始終の勝利叶ふべくも候はねば、老臣等心を合せ、斯くは内談仕り候なり。將軍家御許容に於ては、正儀申聞かせ候べし。若又承引仕らず候は、老臣數人誓書を差上げ、正儀の實子を盗み取り、御幕下に屬して、忠戰を盡すべく候。然るに於ては、楠が一跡の事、彼幼子に給はるべく候や。此儀御許容なきに於ては、力なく討死を思ひ極め候べしと申しければ、將軍も今は實ぞと思召し、楠味方に屬しなば、天下は一時に治まるべし。

然る上は河内・和泉・大和・紀伊四ヶ國の守護職を賜はるべし。若老中忠あらば、河内一國を與ふべしとなり。斯る所に又老臣等いひ送りけるは、此度正儀に申聞かせ候處に、曾て承引仕らず、自害せんなどと怒り候。又幼子多門丸の事、内々の企を、如何して知り候ひけん。片時も傍を離さず、却て我々を討たんと議せられ候なり。然れば我々味方に參らずとも、攻めさせ給ふべき城にて候へば、只攻寄せられ候へ。我々が役所より引入れ申候はんとなり。寄手も何とやらん實しからず思ひ居ける所に、千劔破より夜中に松明を燈しつれ、大勢八方へ分れ、落行く體を見せし事、五六夜に及びけるが、此落人共、敵の陣中に縁のある者共は、竊に來つて、正儀老中等と不和なる事共、實しやかに語る。數人が口を聞合するに、少しも違ふ所なければ、扱は偽にあらず、押寄せて正儀に腹を切らせ、南帝を捕り奉れとて、同五月廿三日の卯の刻、四方の寄手、同じ時に攻寄せて、さしも嶮しき坂道を、只一息に攻上る。城中には思ふ圖に敵を偽引き寄せ、大石大木を投掛け、打ちける程に、敵の内應を頼みて楯をも突かず、攻支度をも用意せらる。寄手共、何かは以て耐るべき。



四方の谷へ人雪崩を築きて、いやが上に重なり死す。適命を助かりたる者共も、痛手を負ひて、半死半生の體なりけり。

### 尾張守義深敗軍附相公歸陣の事

寄手の大將畠山尾張守義深は、八千餘騎にて居られけるが、敵方よりの返忠は、又偽と覺ゆるぞ。但し塀の本に用意し置きたる大石大木は、早悉く切落しつらん。斯程に味方を討たせながら、此小城を攻落さずんば、後代迄の瑕瑾たらん。只一攻攻めよと下知せらるれば、士卒等金鼓を鳴らして攻懸る。されども以前に懲りて進み得ず、暫く見合はせ居る所に、豫て用意し置きたる事なれば、恩地伊勢守が舍弟六郎一房、早瀬小藤太志貴安間以下、宗徒の者共一千餘人、吉野十八郷の野伏共三千人、此の峯彼の谷蔭より、五百三百一群々々打出づる。畠山が勢、是に駈合せんと、備騒ぎ立つ所に、以前五六夜計り、虚落したる者共、畠山が陣中此彼こゝかしこに顯れて、十騎二十騎づつ、一與にて切り廻れば、寄手大に周章し、大崩れに咄と崩れ立つ。恩地、

畠山義深  
敗軍

志貴・早瀬、得たり賢しと攻鼓を打つて、短兵急に追懸くれば、數萬の寄手一返しも返さず、我先にと落行く程に、長尾新三郎・猪俣小平次・黒田彌一兵衛・石堂三郎・本間美作守・嫡子原屋太郎・安藤九郎・岩崎源太郎左衛門以下、宗徒の者共三十五人、返し合せて討死す。其餘討たれし士卒三百餘人、大將尾張守も危き死を免れ、津々山にぞ引取られける。猶怵へ得ず、天王寺へ落つるもあり。飯盛・八幡・淀・鳥羽まで、落つるも多かりけり。津々山には、細川清氏・佐々木六角入道・赤松彦五郎・土岐・明智・今川以下三十八頭、軍勢六千餘騎ぞ落留りける。和田・恩地等、翌日津々山の陣へ押寄せんと議しけれども、楠大に制せられし。此時寄せたりせば、津々山はいふに及ばず、天王寺の義詮朝臣も、一日も怵へ得給ふまじきを、正儀當世無雙の良將たりと雖、父兄には劣る故に、又圖を脱されけるこそ方見けれ。義詮朝臣も、斯くては重ねて戦ひ難しとて、矢尾・平石・譽田等の城に、赤松・佐々木が勢を殘し置き、楠を押へさせ、同五年廿八日、京都に歸陣し給へば、諸國の勢も、皆都にぞ歸りける。

足利義詮  
京都に歸陣



和田國府開城并譽田・矢尾・平石・水走落城の事

さる程に敵、京都に引取りしかば、楠又打つて出で、平石の城を攻落さる。京勢是を聞きて、時日移さず天王寺に馳下れば、楠方は又山林に引籠る。是は南方退治の爲にあらず、京都將軍家内和せずして、仁木左京大夫義長を、攻滅さんとの密談の爲なれば、頓て京都に引返す。正儀大に悦び、此弊に乗らすんば、時を失ふなるべし。先づ一蒸蒸せよと下知せらるれば、方々の山々に簀を焼き、攻むべき體をぞ見せたりける。和泉の國府の城に居たる細川兵部大輔大に驚き、此勢に取り巻かれなば叶ふまじと、城を開きて落行くを、和田正武の勢、遁さじと追懸くる。渡邊の橋まで、四里が間を追討にしければ、細川が一千餘騎も、過半馬に離れ、赤裸にて逃げて行く。見苦しかりし分野なり。譽田の城にありし杉原入道も、今は渡邊の橋を越さん事叶はじと、矢尾・平石の兩城に評し合せ、水走の城に籠らんと、白晝に引行くを、楠正儀、野伏者五千餘人を打散らして之を追はせ、我身は三千餘騎を堅固に備へて追

懸けらる。矢尾・平石・譽田の城兵等、野伏共に追詰められ、討たるゝもの數を知らず。入道は五六十騎に討なされ、水走の城に入りけるを、早瀬八百餘騎にて、手繁く追懸け追縋つて、外郭を引破れば、本城に引籠り、一日一夜防ぎけるが、叶ふべくもあらざれば、首を延べ降を乞ひ城を開渡し、主従十七人にて、南都の方へ落行きける。

和田小次郎正寛遁世由來の事

然る所に往生院の正寛といへる法師、千劔破に來り、正儀に謁して申しけるは、此度杉原入道が手に屬し、討死仕りて候なる。津山新五と申すは、愚僧が從兄弟にて候へば、首を給はつて孝養仕りたく候と望みけり。正儀聞き給ひ、扱は左様にてありけるか、然らば望みに任せて與ふべしと約せられ、様々響應し給ひければ、佛の道など終夜物語りし、翌日暇を乞ひければ、正儀、新五が首を選び出させ、正寛に與へてぞ歸されける。此正寛が、出家遁世の身となりける其由來を尋ぬるに、赤松が家



子宇野六郎といへる者の一子なり。赤松大夫判官光範は、將軍尊氏卿に專一の者と頼まれ、數年攝津の守護にて居られけるが、一年住吉合戦に、家子宇野六郎、忠戦を勵み討死す。然るに六郎が一子熊王といへし者、未だ幼少なりけるが、光範にいひけるは、楠は正しく親の敵にて候へば、如何なる術をも巡らし、近づき寄つて、討つて本意を遂げたく候。願はくは御許を蒙り、河内へ打越え、正儀に仕へたく候。然らば幼少なる身にて候程に、定めて心許し仕らん。よし又心許し仕らすとも、七八年も仕へ候内には、討つべき便の、などかなくて候べきと望めば、光範もいと哀れに思ひながら、幼少なる者を、敵國へ遣らんも心元なく、又命に代りて討死せし者の子なれば、形見にも見たく思はれしかども、強ひて望む上は力なく、常に身を離さず、帶せられける三振といふ名劔を與へ、是にて本意を達すべしとて、士共多く添へて、安倍野までは送らせられける。其より熊王は、童一人を具して、千劔破の城に行き、其邊に徘徊しける所に、兵庫助忠元之を見付け怪しく思ひ、如何なる人によと問へば、是は赤松大夫判官光範の郎從宇野六郎と申す者の子に、熊王と申す者

にて候が、一年住吉の合戦に、父の六郎討死仕り候ひしを、一族にて候宇野備後守我を追討つて、所領を奪ひ候へども、主人光範と心を合せ候へば、力及ばず候故、如何なる寺にも入り候ひて、僧法師にもなり、父が跡をも弔ひ申さんが爲め、斯く浮れ出で候と語れば、忠元哀れに思ひ、其より我宿に伴ひ歸り、様々とぞ勞りける。其後忠元、大將正儀に斯くと語り、未だ幼少には候へども、心ばせ賢々しき者にて候といへば、正儀も哀れに思ひ、具して參るべしとて對面し給ひ、其より傍近く召使はれけるが、本より情深き人なりければ、熊王も其恩惠を感じ、二心なく奉公を勵みけり。正儀も彼が忠勤の程を感じ、十五六歳にもなりなば、河州の内にて少の地をも領せさせんと宣ひしかども、少しの高名も仕りてこそと辭しにけり。斯くて文和二年、父六郎が七回忌に當りけるに付きて心に思ひけるは、父の讎には、俱に天を戴かずといへり。今宵は正儀を討つて、父の手向にもし、光範の御心をも、休め奉らんと思ひ立ちけるに、其日正儀、今日は吉日なれば、熊王に元服せさせしとて、和田和泉守の烏帽子子になし、和田小次郎正寛と名乗らせ、吉野の主上より賜はり



たる緋緘の鎧を、小次郎にぞ與へられける。熊王涙を流し、悦ぶ事限りなし。夜に入りて正儀の前にありけるが、年來の本意を遂げんは、今宵にこそと思ひ膝を直し、正儀に目を懸け、るが、此年頃情深かりし事共、又は今日の元服につけて、其厚恩を思ひ續くれば、争でか情なく討ち奉らんと思ひ返し、心を静め居たりしに、能々思ひ巡らせば、正しく親の敵といひ、又は譜代相傳の主君の怨といひ、一方ならぬ怨敵なるものを、是非一討にと思へども、何心もなく居給ふ有様を見れば、痛はしく悲しさの餘りに、廣縁に出で、大聲を揚げて泣き叫ぶ。正儀を始め諸人、こは何事ぞと驚き、障子を開きて如何にと問ふに、小次郎暫く涙を押へ、斯様々々の次第故、正儀公を討つて、父の讎を報せんと思ひ候へ共、此年頃の御情の程、今日の御恩の忝き事を思へば、争でか恐れ多くも討ち奉り候べき。此上は君の爲め先君の爲め父が爲めに、自ら死なんより外は候はずとて、既に腹を切らんとする、諸人抱き留め刀を奪ひ取りて、大に諫め制しければ、小次郎も兎角の事をもいはず、平伏して泣き居しが、又刀を取つて髻押切り、頓て往生院に行きて、剃髮染衣の身となり、君より給はりたる名なればとて、正寛を改めず、正寛法師と號し、往生院に幽なる庵を結び、道心堅固に、世捨人となり、行ひ澄して居たりけるが、若も心の變る事もやあらんとて、往生院の門より外へは、曾て一足も出でざりければ、出家以後、初めて此時千破劍へも、參りけるとぞ聞えし。

神崎合戦附正儀謀略の事

爰に攝州の守護職は、赤松信濃守範資嫡男判官光範、相續いで二代守護し居たりけるを、此度將軍南方に在陣し給ひし時、軍用の沙汰、毎時不足なりけるを憤り給ひけるを、佐々木佐渡入道道譽、折に幸と、種々の讒を構へ、赤松が攝津の守護を召放たせ、己が恩賞にぞ申給はりける。楠左馬頭正儀、此事を傳へ聞き、和田和泉守正成を招き、某攝州の赤松を追拂はん事は、最安く覺えしかども、公家の政道悪ければ、却て敵の擒とならんと思ひ、今まで打捨置きしなり。さりながら新しき攝州の守護の手並を見ざらんも、無下に言甲斐なく覺ゆれば、馳向つて一戦仕らんとて、術の



次第を密談し、正儀は五百餘騎、正武は二百餘騎、野伏共一千餘人を催し、康安元年正平十九月廿七日の夜、渡邊の橋を打渡り、地の形勢を見澄し、野伏三百餘人、精兵の射手を勝り、葦の茂りたる中に、廿騎卅騎あて伏せ置き、五町を退きて、和田二百餘騎伏兵となつて、是も葦原に忍び居る。其より五六町を退いて、楠左馬頭、五百餘騎を一手になし、菊水の旗只一流押立てたり。佐々木道譽が嫡孫近江判官秀詮、折しも在國したりけるが、楠が分限、何程の事かあるべきとて、翌くれば廿八日、先陣の吉田肥前坊六百餘騎、後陣は佐々木兄弟七百餘騎、神崎の橋を越えて進んだり。正儀の忍びの中に、板持次郎といひける者、宵より佐々木が陣に忍び居しが、秀詮が郎等共に語りけるは、某は中島の在家の者にて候が、楠が發向故、妻子をも打捨て、逃げ來りて候なり。今夜川を越えられ候は、和田和泉守殿にて候。楠殿は、跡より向はれ候といふ。士卒共、秀詮に斯くと語れば、扱は正儀が來らざる以前に、和田が勢を討散らさんと勇まるれば、肥前坊聞きて、同じくは楠をも渡らせて後、向ひし敵を塵にし、明日は河内へ發向せんものをと荒言吐けば、諸勢も勇み進みけり。楠は

敵の心を弛ませて後、雜人を走らせて、楠は西より寄せ候ぞ。神崎の橋爪を支へられ候へと呼ばらせられければ、すは楠は跡より寄するぞ、引返せよと、肥前坊を始め、深田や沼の中なる細道を、一騎計に長々となつてぞ打つたりける。正儀、時分は今ぞと下知せらるれば、本陣より太鼓を打出す。野伏共三百餘人、豫て相圖の事なれば、方々の葦原より起つて、廿騎卅騎づつ群り出で、深田を前に當て、沼を隔て、差詰め引詰め横矢に射ければ、佐々木が勢は、的になつて射られける。先陣の肥前坊が六百餘騎、深田の中へ逃入りて、人馬上が上に重なり合ひ、只泥に塗れたる魚の如し。後陣に打ちける近江判官秀詮、あれ駈散らせよと下知せらるれば、士卒等野伏を駈倒さんと、一騎打の道を、遙々取つて返しけるが、敵の射る矢雨の降るが如くなれば、射落さるゝ者數を知らず。射殘されける者共、廣みへ出でて追拂はんとする所に、又葦原の中より和田が加勢二百餘騎、咄と叫んで切り入りしかば、佐々木が勢一戦にも及ばず、我先にと逃行く程に、泥中に追入れられて、或は討たれ或は生捕られ、又は心ならず自害するも多かりけり。正儀士卒に下知し、一隊を二隊に分け、二百餘騎

正儀、島  
山秀詮の  
軍を破る



を、備を亂して追はせければ、敵を討つ事若干なり。近江判官兄弟は、肥前坊と一手にならんと、廿騎計りにて落行く所に、肥前坊は、早中津川の橋を逃げ渡り、追ひ來る敵を落さじと思ひけん、橋板二三間引落して逃げ行きしかば、佐々木兄弟、今は遁れぬ所と、取つて返して討死せられしかば、瓜生次郎左衛門父子兄弟三人、縣次郎久季以下、我もくと討死す。此時宗徒の者の首八級、其外の首を得ること三百七十餘級なり。生捕二百六十餘人ありけるを、正儀情深き大將なれば、手負ひたる者には藥を與へ、赤裸なる者には小袖を着せ、悉く京へ返し遣はされければ、諸人皆情の程をぞ感じける。斯りける所に、將軍義詮の執事細川相模守清氏、逆心の聞えあつて、京都以ての外に騒動しけるが、清氏、都の住居叶はずして、若州に逃下り、又若狭をも落ちて南朝に參り、降を乞ひしかば、罪過恩免あつて、朝敵誅伐の謀を巡すべしと敕諭ありしかば、清氏大に悦び、楠正儀と評定し、正平十六年北朝康安元年十二月三日、住吉天王寺にて勢揃へして、京都を指して攻上る。相公義詮朝臣、叶はじと思ひ給ひけん、同八日に江州へ落ち給へば、頓て清氏、正儀以下、京都に入替へられけるが、相公程なく多勢になり、諸方より攻上らる、由聞えしかば、官軍は都を落ちて、又南方へぞ引返しける。

南朝太平記卷第廿二終



## 南朝太平記 卷第廿三

### 左馬頭正儀神崎發向の事

さる程に楠左馬頭正儀は、攝津の地に發向し、其頃佐々木が守護代として差置かれたる箕浦を追拂ひ、攝津に數ヶ所の城を築き、西國の兵を防がせ、其後上洛して、四國に居給ふ。細川相模守清氏と牒し合せ、一時に將軍義詮を追落し、此度は公家の人の評定に係はらず、何國迄も義詮を追懸けて、悉く攻滅し、四海一統の切を立つべしと、勢を集められける所に、楠主上を恨み、逆心の企ある由風聞す。君も大に驚かせ給ひ、叡慮を苦しめさせ給ふ所に、正儀此事を傳へ聞き、恩地伊勢守を以て奏せられけるは、正儀隱謀の由申す諸卿の候由、某父兄より以來、天恩に依つて三ヶ國を管領仕り候所に、百姓等に非道を申懸けらるゝ諸卿多く候。是皆下司公文奉行

等が仕る所にて候はんか。正儀是を誠る故に、私曲人等、其主人に向つて正儀を讒し候を、實と思召す諸卿多く候故、斯く讒口に懸り候なり。若隱謀を企て候はゞ、勢を催す迄もなく、君を傾け奉らん事は、恐れ乍ら掌を返す如くに候はんか。此度は細川と兼約仕りし故に、攝州に發向仕らんと、其用意仕る所なり。所詮猶も不審を殘され候に於ては、一子多門丸を、法性寺殿へ預け奉り候ひなん。諸卿正しからず候故、斯く取り易き天下を、今に至つて武家のものとなし置かれ候なり。せめて武の一偏に於ては、枉げて北面の輩に御任せ候へかし。以前より申候へども、大將の敕許なければ、十死一生の軍を仕る事も候はず。定めて武略の足らざる誹にぞ落ち候ひなん。此故に諸卿へ披露をもなさず、兵を集めたる所にて候とぞ奏聞せられける。是等の事に日數押移りける間に、清氏の舍弟細川右馬助・同掃部助二人、河州に來つて、清氏討死の由を語られしかば、正儀も力落されけり。さればとて又止むべきにもあらざれば、康安二年八月十八日、正儀八百餘騎にてぞ打出でられける。和田和泉守正武五百餘騎、天王寺まで馳着くる。恩地伊勢守三百餘騎、矢尾次郎二百



餘騎、志貴・早瀬百七十騎、丹下・牲川・安間・湯淺・富田野・長瀬・天野等、五十騎百騎馳加はり、七千餘騎にぞなりにける。此勢を二手に分けて、神崎の渡へは、和田・早瀬・湯淺・淺野・長瀬・矢尾・天野等、三千餘騎を差向けらる。此勢、橋より此方に陣を取る。株瀬へは、恩地・伊勢守を大將にて、安間・高安・丹下・牲川、二千五百餘騎を差遣し、大將正儀は、一千六百餘騎にて、一里計引退き、天王寺に陣をぞ取られける。

### 箕浦俊定敗北附池田十郎教正武勇の事

佐々木が守護代箕浦次郎左衛門尉俊定、此事を聞き大に驚き、箕浦彌次郎同四郎左衛門・鹽谷六郎・多賀將監・瓜生・木村以下、百餘騎を株瀬の渡へ差遣し、我身は伊丹大和守・河原林・彈正左衛門・池田十郎教正・芥河右馬允以下、三百餘騎を引率し、神崎の橋爪に馳向ふ。斯くて四五日が程は、敵味方對陣して居たりけるが、元來正儀は、敵に斯く防がせ置きて、思ひも寄らぬ餘所の瀬より渡し、不意に敵の後を討つて、河中へ追はめんと、豫て巧まれたる事なれば、八月十六日の夜半計に、二十餘町上なる

箕浦俊定  
敗走

三國の渡りより、千六百餘騎を、三つに分けてぞ渡されける。翌くれば十七日の曉天に、京勢の眞似をして、旗笠印をも引隠し、箕浦が陣の後より、不意に押寄せ、一聲鬨を擧ぐる程こそあれ。先陣庄・石川が五百餘騎、菊水の旗を颯と差上げて、無二無三に切つて入る。次は正儀、八町計退きて、六百餘騎の逞兵共を、三軍に分けて進まらる。後陣は志知・藤倉五百餘騎、十餘町退きて、小屋野・富松の民屋に火を放ち、多勢の體をぞ見せたりける。箕浦が勢周章騒ぎ、上を下へと騒動す。次郎左衛門尉俊定も、物具すべき間もなかりければ、太刀計り取りて出合ひける。和田和泉守は、神崎の橋爪にて、三千餘騎にて控へけるが、時分は能きぞといふまゝに、豫て餘多用意したる持楯を、橋桁に渡しかけ、其上に薙を多く持掛けたれば、宛も東海道の如くなり。人馬思ふまゝに打渡し、喚き叫んで攻懸れば、箕浦が勢一戦にも及ばず、我先にと落行く程に、堀溝に落入りて、討たる者數を知らず。大將正儀は、先勢五百餘騎、備を亂して追懸けさせ、我身は、旗本の勢六百餘騎、備を正しく見物してぞ居られける。伊丹・佐和・鹽川・河原林以下、踏止りく、枕を雙べて討死す。爰に池田



十郎教正といひしは、正しく正行の息男なりとぞ聞えし。其故を尋ぬれば、教正の母は、攝州野瀬の庄の住人内藤右兵衛尉満幸が息女なりけるが、正行四條繩手にて戦死の後、仔細あつて正行の後室を、正儀、故郷に送り返さるゝ。彼後室は、只ならぬ身にてありけるを、父満幸の計らひにて、再び同國の池田九郎教依に嫁せしめけるに、程なく男子出生したりけるを、さる明將の子なれば、成長の後、如何なる譽をか顯すべきとて、教依、己れが子として養育しけるが、今は早池田十郎教正と名乗りて、十九歳にぞなりにける。然るに教正、父九郎が名跡を續ぎて、京方にてありし故、箕浦が手に居たりけるが、何の間にか着たりけん、鎧一縮し、鹿の角の兜を着て、逞兵二十騎計を前後に立て、靜々と向ひけるが、士卒に下知して、斯る時は、死なんとすれば生き、生きんとすれば却て不覺の死をするものぞ。敵も他人にあらず。汚き舉動をすべからずとて、勢を魚鱗に立て、敵中に駆入りく、七顛八倒して相戦ひ、追拂ひくして落ちて行く。嚴しかりし働なり。されども敵は多勢なれば、士卒次第に討たれて、今は主従只五人になり、我身も鎧の袖草摺皆切り落され、椋の木の陰に、暫く息つぎ休み居たる所に、箕浦次郎左衛門尉俊定、馬にも離れ、歩行立になり、逃げ行きければ、教正を敵なりとや思ひけん、猶も足早に落ちけるを、教正、如何に箕浦殿とこそ見れ。是こそ池田よ、御心安かれとて、郎等の乗りたる馬に搔乗せ、都を指してぞ上りける。此時芥川右馬允も、池田に命を助けられて、落延びけるとぞ聞えし。

### 箕浦彌次郎最後并堀新右衛門勇力の事

爰に箕浦彌次郎は、株瀬に向ひ備へける所に、神崎に當つて、関の聲矢叫びの聲、響き渡つて夥し。扱は早合戦始まりたりと覺ゆ。何とある事やらんと、其方を詠めやる所に、川向の敵軍より、箕浦殿を始め、悉く討取りたりと、聲々に喚はつたるに、早所々の民屋に火かゝりたり。彌次郎大に驚き、今は戦ふとも叶ふまじ。淨光寺に楯籠つて、敵を防ぐべしといふ所に、士卒等主を捨て、十方に落ちて行く。和田が勢是を見て、一同に川へ打入れ、流れを切つて押渡す。箕浦大に仰天し、木村・後藤



等を相從へ、淨光寺を指して落行きける所に、正儀の後陣の兵五百餘騎、三軍に分つて淨光寺の前に備へたれば、沼多くして、一騎打の細道を、長々と通らんに、的になつて射落されんは治定なり。只々取つて返して、後なる敵を追拂ひ、横切に尼崎を指して落ちよとて、後へ取つて返せば、和田が先陣群り立ちて控へたり。森・箕浦等、能き程の相手ぞと、一同に咄と駈立つれば、和田が先陣敗北す。されども後陣の和田和泉守、二百餘騎を正しく備へ、沼を前に當て、散々に射させければ、箕浦が勢勇氣疲れ、我先にと落ちて行く。多賀左近將監も、馬を射させて歩立になり、近付く敵を射拂うて落ちて行く。箕浦彌次郎、今は是迄なりと、敵の群立ちて控へたる中へ、只一騎切つて入る。志の程は深けれども、十六歳の若武者なれば、敵八騎に取籠められ、終に討死をぞしたりける。同四郎左衛門尉は、内兜に深手負ひて、田の中に伏したりけるが、姪の彌次郎討たれしと聞きて、既に自害せんとしたりけるを、堀新右衛門走り來り、大男の一縮したるを、鎧の上に搔負ひ、持ちたる長刀を森木になりし、尼崎の道場まで、只一息にぞ落行きける。正儀は思ふまゝに討勝ちて、首實檢せ

られけるに、三千七百餘級・生捕百餘人とぞ記しける。さる程に攝州の國府には、箕浦が下代山郷勘解由を始め、敗軍の者共少々相集まりて、二三百人にて居たりけるが、楠、今日は先づ引退きなん。若此處に發向すとも、五六日は過ぎなんと思ひ居し所に、翌日正儀、直に國府に寄せられしかば、敗軍に氣を失ひたる軍兵共、何かは以て怵ふべき。其夜城を捨て、悉く落ち行きけり。正儀悦び、翌日城に入替り、其より伊丹へ押寄せられしかば、是も城を明退く。此の如く攝州一國の中は、向はざる以前聞逃にして、落ちたる城十八ヶ所に及びけり。

### 正儀發向兵庫并池田城攻の事

さる程に楠左馬頭正儀は、國府にあつて、吉野の皇居に使を馳せ、攝州の逆徒等を、悉く追落して候へども、赤松兄弟播州に便りて、兵庫の城に楯籠り、又赤松を頼みに、池田十郎五百餘騎にて、池田に籠城仕り候。早く渠等を退治仕度候へども、國中の城々に勢を分けて候故、殊の外無勢に候。當時紀州・和州の者共數千騎、皇居に召



置かれ候。今何國よりか、朝敵亂入仕るべきなれば、先此勢を當國へ差向けられ候へ。池田・兵庫の兩城を攻落し、其より京都に押寄せ候はんと、奏聞し給ひけれども、京勢若楠がなき間を窺ひ、寄せ來る事もあるべければ、油斷すべきにあらずとて、石堂右馬頭に五百餘騎を相添へ、攝州國府へぞ遣されける。楠頭をかき、吾君の爲に一命を経んじ、様々謀を巡らすと雖、諸卿斯く勝つべき圖を脱し給ふ故、數度の戦功を、皆水になしつるぞや。今京都に如何なる敵あつてか、吉野には寄せ來るべき。あたら勢を遊ばせ置きて、糧を費し給ふ事よとぞ咥かれける。斯くて石堂、國府に着きしかば、正儀四千三百餘騎を引率し、兵庫の地に發向し、震々雷々として攻動かす事夥しく、既に城下の町を焼拂はれしかども、豫て城主の判官兄弟が方へ、伯父則祐津師方よりいひ送りければ、敵小勢なりとて、味方の多勢を頼み、城より出でて戦ふべからず。良將の小勢なるは、却て軍難儀なるものぞ。楠は日本無雙の弓取なり。卒爾の合戦せらるべからずと、いひ遣はしければ、赤松兄弟一騎をも出さず、城中に引入りて相守る。正儀謀を巡らし、夜討をして一陣を焼崩し、敵を討つ事

二十餘人。然れども自餘の陣々峯々を取つて、靜り返つて居たりければ、正儀思慮し、此城は急に攻落し難しとて、翌日引取り給ひけり。其より直に池田の城に押寄せらる。池田十郎教正、素より勇氣甚しき若者なれば、打出でて戦はんと進まれけるを、郎等共堅く之を制し、城を守つて拒ぎけり。既に城を攻むること二十日計に及びける所に、京都の多勢攻下る由聞えしかば、味方の疲れたる小勢を以て、荒手の大戦に戦はんは、危き軍なるべしとて、西宮・尼崎邊に引入られければ、池田の城兵等、悦ぶ事限りなし。京勢此地に發向すとも、將軍の威輕ければ、二十日十五日は延引しなん。然れば楠、今四五日も城を攻めて、城中に和を入れなば、落つべかりしものを、是ぞ正儀の、父兄に劣りし驗なり。

### 正儀被燒敵船附千劔破歸陣の事

さる程に京都には、池田の城攻落されなば、事難儀に及ぶべしとて、執事斯波太夫入道道朝の子息二人を始め、佐々木佐渡判官入道道譽・同六角入道崇永・土岐の一族



以下相加はつて二萬餘騎、都を立ちて、淀・鳥羽・赤井・大渡・西岡邊に陣を取る。細川右馬頭頼之は、四國の勢六千餘騎を催し、兵庫に着きて赤松と一手になり、京勢下らば、牒し合せて攻めんとて、多田部の城に入り、諸勢は山々に陣取らせ、番西の兵五百餘騎は、舟守護の爲に置かれけり。正儀此事を聞き給ひ、謀を巡らし、同九月廿五日の夜、委く術をいひ含め、忍びの賊船三十餘艘をぞ差遣されける。其中に賊船十餘艘は、和田崎より上つて、兵庫の在家に火を放つ事七ヶ所なり。番西の者共、之を見て驚き騒ぎ周章す。軍勢共は、兵庫の北の山々に陣しぬ。水主梶取共は、前後も知らず寝入りたる最中なるに、二十艘の賊船共、皆小船なれば、磯傳ひに阿波讃岐の敵船の中に入り交り、六千餘艘の兵船に火を放つ。水主梶取共は、兵庫の在家に火を見て、やれ夜討よと騒ぐ所に、己等が舟より火出來りぬれば、こは如何にと騒動して、海中に飛入りて、水に溺れ死する者、何百人といふ數を知らず。時に賊船より、関を咄と作れば、兵庫にありし楠が兵百餘人、同じく関を合す。其勢小勢なりと雖、味方の騒動する聲、山に響き海に答へて、多勢の様に聞えければ、狼狽へ廻る

程に、大船小船共に磯へ押寄せ、纜を切り船を捨て、海中に飛入り逃ぐるもあり。楠方は小船なれば、海中に溺れ漂ふ者共を、敵船の焼くるを松明として、射殺し切殺す事數を知らず。敵船に積置きたる兵糧を、舟餘多に取乗せ、西宮に送らせぬ。素より小勢なれば、其餘の舟をも兵糧をも、皆之を焼捨てけり。楠方の者共は、敵の兵庫に積置きたる兵糧をも焼捨て、和田崎より舟に乗り、皆同時に、西宮・尼崎にぞ歸りける。細川右馬頭頼之は、楠多勢にて寄せ來れり。味方出合へば、謀を以て戦はんとの術なり。一人も出づべからずと制せらる。赤松を始め、阿波・讃岐の軍勢共、明日は軍あるべしと、鎧を着し得物々々を提げて、馬引立て待ちたれども、夜明けて見れば、敵一人もなし。物見の者共歸つて申しけるは、道筋に馬の足跡多く候。定めて楠寄せたりと覺え候といふ。頼之聞き給ひ、楠は寄すべからず。兵糧を焼かん爲め、賊船をかけつるならん。又謀られつる口惜しさよとぞ宣ひける。是より細川は、兵糧忽に盡きたるのみにあらず、二度迄焼かれたれば、士卒疲れ苦んで、六千餘の軍勢も、二千六百餘になりける。其後和田和泉守、楠に向ひ、某泉州の兵船を以



て、兵庫の宿又は敵の兵糧船を焼き候べし。正儀は、追手より寄せ給へ。然らば頼之  
出合ひ候べければ、一戦に打散らして候はんと申さる。正儀聞き給ひ、頼之は、軍  
の法を知る將なれば、夜中に兵を出すべからず。夜明けて某が兵を引入れんずる  
所を、附慕ひ追懸けなば、由々しき大事なるべければ、無益なりとぞ制せられける。さ  
る程に京勢は、山崎へ向はんと議しけるが、細川兵庫にて打負けられぬと聞えけれ  
ば、扱は楠、此方へぞ寄せんすらん。謀られて犬死すなと、佐渡判官入道、淀を立ち  
て都に引返せば、同六角入道も、西岡を立ちて、京都に引返す。是を始めて二萬餘騎  
の京勢等、何といふ分ちもなく、我もくと逃歸る。見苦しかりし分野なり。頼之  
は、猶も兵庫を退かれず、正儀も、翌日兵庫に發向し、二日對陣して後、尼崎に引返さ  
れけるが、同十一月廿三日、尼崎に、矢尾五郎を五百餘騎にて殘し置き、伊丹の城に  
は、丹下志貴三百五十騎、津の國府には、恩地伊勢守を殘し置き、正儀は河内に歸陣  
し給ひけり。頼之京都に早馬を立て、急ぎ御勢を差向けられ候へ。當國敵の物とな  
り候は、西國通路の煩となり候べしと申されけれども、諸國の軍勢、將軍の催促  
に従はねば、力及ばで止み給ひぬ。是に依りて右馬頭頼之も、兵庫を引拂ひ、四國に  
ぞ歸られける。

## 細川武藏守頼之南方發向の事

茲に南方の恩地六郎は、去ぬる正平十七年の春より、四國に下り、土居得能を始め、  
曾川中川以下の者共を語らひ、近國の宮方を催すに、阿波の下山伊賀守、伊豫の今  
張の浦に着きて、恩地に一味し、國中にある所の京方の城十六ヶ所攻落せしかば、恩  
地國中に威を震ひ、其より讃岐に押渡り、細川兵部大輔と一手になつて、右馬頭頼  
之の目代、天野四郎が白峯の城を攻めける所に、中院源少將、西長尾の城より、三百  
餘騎にて打つて出で、恩地が勢と一手になり、白峯を攻めけれども、此城元來堅城  
なれば、如何ともすべきやうなく、只守りてぞ居たりける。時に九州より、名和伯耆  
權守長秋、安藝の國へ押渡りて、大内介が城を攻む。南方には和田楠、所々に楯籠  
つて、合戦の止む時なし。斯る所に貞治六年極月七日、征夷將軍義詮薨逝し給ひし

足利義詮  
逝去



かば、若君義滿を守り立て參らせ、三代の柳營と仰ぎ參らす。此時細川右馬頭頼之、執事職に補任せられ、四國より上洛し、武藏守に補せられ、天下の政道を執行はれけるが、此人前代に替りて、専ら仁政を行はれければ、諸國の士靡き從ふ事、古に百倍せり。斯くて翌年は、南方の正平廿三年北方の應安元年に當る三月三日、楠左馬頭正儀、吉野殿に參内し、當年は父正成が、廿三年の遠忌に相當つて候へば、命を限りの弔合戦を仕らんと存じ、豫て新田・菊地以下の官軍に觸れ送り候へば、定めて東西より攻上り候はん。正儀が龍顔を拜し奉らん事も、是を限りとこそ存じ候へと奏せられければ、南帝大に驚かせ給ひ。汝が父正成、義を守つて節に死すると雖、是より官軍勢ひ盡き、此の如く南山に苦しむ事幾干ぞや。今汝討死を定めば、朕先立つて玉體に刃すべしと、龍顔に御涙を浮めさせ給へば、正儀も涙にくれ、兎角の敕答にも及ばず、千劔破に歸城せられけるが、同じき十五日より、千劔破・赤坂・矢尾・飯盛四ヶ所の城に楯籠つて、四天の氣を顯し、天下を一時に覆さんとぞ勇みける。京都の執事武藏守頼之此事を聞き、某大將軍に代つて南方に發向し、根を斷ち葉を枯らさんと、既に

都を打立たる。相從ふ人々には、尾張越中守義將・畠山尾張守義深・山名伊豆守時氏・同左衛門佐師義・同民部少輔氏清・今川上總介泰範・佐々木佐渡入道判官道譽・赤松筑後守光範・宇都宮・三川三郎以下、都合其勢十萬餘騎、同じき四月八日都を立ちて、攝州中島に陣を取り、軍勢を四つに分け、其二つを以て千劔破・赤坂を圍ませ、其一つを以て、飯盛の城へぞ差向けられける。

### 矢尾城軍の事

然る所に同十五日、武藏守頼之三萬餘騎を率し、矢尾城に押寄せ、攻動さるゝ事雷霆の如し。城中には、酒邊右馬助延綱・佐和入道正善等士卒を下知し、四方の矢倉へ精兵の射手を登せ、散々に射させければ、手負死人數を知らず。茲に佐々木小次郎高重といふ若者、今年十五歳の初陣なりけるに、音信の爲め執事の陣に來りけるが、我邂逅此場に來つて、何ぞ先陣を他に讓るべき。續けや者共とて、堀際に駈寄せ、三間餘りの長木に繩を結び付け、向の岸に刎かけ、梯となして打渡り、堀に手を懸け、



る所に、羽床三十六七騎にて續きけるが、小次郎が上帶攪んで引落し、讃州の住人羽床三郎、今日の先登ぞやと高聲に名乗りけるが、城中より射る矢、雨の如くなれば、羽床を始め此手の者共、悉く射落されてぞ死んだりける。小次郎大に悦び、再び塀上に上つて、一番乗と名乗る。是に續いて諸勢、咄と乗入りしかば、外郭を乗破る城兵、今は叶はじと、搦手より打つて出で、東西に駈破り南北に追廻し、縦横無碍に相戦ひ、城中に引入りて、味方の勢を數ふるに、五百餘騎の者共、八十三騎にぞなりにける。今一度快く、最後の合戦をすべしとて、大將頼之の七千餘騎にて控へられたる旗本へ切懸る、其來銳利を碎き堅きを破りしかば、寄手是に辟易し、騒ぎ立ちて見えし程に、既に崩れつべく覺えければ、頼之、香川將相を招き、御邊馳向つて静められよ。さなくば味方敗しぬと覺ゆるぞとて、金の采配をぞ與へられける。香川大に悦び、馳廻つて下知すと雖、多勢の騒ぎ立ちたる癖として、備へ曾て静まらず。多くは崩れて逃退く。香川今は是迄と眞先に進み、佐和兵庫介と渡し合ひ、終に討死をぞしたりける。されど寄手多勢なれば、十方より取巻き、矢衾を作りて射

たりけるに、一日着温めたる鎧なれば、何かは以て耐るべき。八十三騎の者共、身に矢の四筋五筋立たぬ者なく、悉く朱になり、或は自害し又は討たれて、忽矢尾落城にぞ及びける。

南朝太平記卷第廿三終



## 南朝太平記 卷第廿四

## 金剛山城軍并飯盛合戦の事

さる程に山名伊豆守時氏・同左衛門佐師義・同民部少輔氏清・今川上總介泰範以下は、其勢一萬餘騎にて、千劔破の城を取籠まれけるが、早矢尾は落城しぬと聞えしかば、我々天下に武名を顯はしながら、武州に越されけるこそ安からね。敵兵は僅二千餘騎、味方は其に十倍せり。倡や當城を攻落し、名を後天に揚ぐべしとて、一萬餘騎の勢を以て、山川も崩れよと、喚き叫んで攻寄する。楠左馬顯正儀は、此度討死と勇まれしかども、君の敕誼の忝さに、謀を巡らし、身を全うせんにはと思ひ定め、城より外へは、嘗て兵を出されざりけるが、士卒に下知して、必ず浮矢射べからず。近々と偽引寄せて、塵にせよと制せられしかば、城中靜まり返つて音もせず。寄手氣に

乗つて、切岸の下まで攻付け、競ひ進んで登らんとする所に、城兵等、時こそ能けれど、矢を射出す事雨の降るが如く、鈎炮礮を二三十、一同に切つて落せしかば、手負死人数を知らず。新に紅の山を築き上げたり。折節黒雲天に滿ち、大雨俄に降出し、疾風大木を吹折り、山谷崩れて、平地になる計なれば、寄手大崩れに崩れ立ち、親を捨て主を踏倒して、逃ぐるともなく轉ぶともなく、我先にと敗北す。淺猿しかりし事共なり。爰に飯盛の城の寄手土岐大膳大夫入道善忠・佐渡判官入道道譽・同治部大輔高秀・同山内入道崇譽・同六角入道崇永以下一萬三千餘騎、城を取圍んで攻動す事、更に晝夜の分ちなし。寄手も此城を揉落さんと潛き連れて攻めけれども、士卒等、命を義に替へて防ぎ戦ひしかば、寄手討たるゝのみにして、早晚落つべしとも見えざりけり。大將細川武藏守頼之、熟思慮を巡らし、いやしく此處に長居せば、却て敵の術に陥れられ、見苦しき負を仕出すべし。兎角勢を打納めんにはとて、山名民部少輔氏清を、一萬餘騎にて殘し置き、楠を押へさせ、諸勢を引纏めて、京都に歸陣し給ひけり。



## 細川氏春紀州軍の事

斯る所に北方の永和四年、南方の元徳四年、楠左典厩正儀の下知を受け、橋本民部大夫正時・神宮寺小太郎師總・宇佐美次郎正種、三千四百餘騎にて、紀州土丸の城に楯籠り、近邊を侵し掠む。此民部大夫正時は、故橋本八郎正員が一子なり。次郎正種は、宇佐美次郎澄正が孫河内守正安が子なり。小太郎正總は、故神宮寺太郎兵衛が孫なり。此二人は、故廷尉正成の一族家子にて、判官と共に、湊川にて生害したりし、無一の忠臣共の子なり孫なれば、憤怒の思を一時に散じ、年來の本懐を達せんとぞ勇みける。是に依つて同十一月八日、京都の討手として、細川兵部大輔氏春、三千餘騎にて馳向はる。三輪五郎、宇佐美次郎に向ひ、定めて京都の多勢、攻下らんと待ち候所に、月候を以て見せ候へば、存の外細川小勢にて候由、三千にはよも過ぎじと申候。然れば味方より逆寄せにして、敵兵明日難所を越えん所を、不意に合戦を始め、追散らし候はんといへども、いや／＼當家の先例に任せ、兎角敵を僞寄せ、

術を以て殺したるこそ、味方の勢をも損せず、必勝の謀にて候ぞやとぞ制しける。斯くとも知らず細川が先手、紀伊和泉の集り勢共、土丸の城に押寄せると等しく、只一息に採落さんと攻上る。城兵は矢一筋をも射出さず、静まり返つて待居たり。寄手彌氣に乗つて、我先に高名せんと、楯を一面に潛きつれ、曳や／＼と攻上る。橋本民部大輔正時是を見て、やれ時分こそ能けれとて、堀に掛けたる石弓大石小石を刎落し／＼、散々に攻立つれば、手負死人、見る中に山の如く出来れり。寄手大に仰天し、周章漂ふ所を、出堀狭間の陰より、差詰め引詰め散々に射る。寄手討たる者數を知らず。前後の諸陣、一同に敗しけり。此事京都に聞えしかば、細川左京大夫頼元・山名修理大夫義理・舍弟民部少輔氏清以下二萬五千餘騎を、加勢として差下さる。此勢同じき十二月七日、土丸に來着す。城兵是を聞き、敵の不意を討つて、其銳氣を抜くべしと、其夜五百餘騎にて、夜討に出で、敵將右京大夫頼元の陣へ寄せ、所々に火をかけ、喚き叫んで切入りしかば、長途に疲れたる軍勢共、驚き騒ぎ、一戦にも及ばず、赤裸にて落ちて行く。頼元も、痛手三ヶ所被り、取太刀計りにて、郎等の清村



に助けられ、漸々として落ちられけり。山名義理、舎弟氏清、士卒を従へ馳せ着かれしかども、城兵早入りしかば、山名兄弟大に悔み怒り、よし／＼城を攻落して、武名を發せんと進まれし程に、右京大夫頼元も、當城を乗破つて、恥辱を雪がんと憤られければ、衆議是に一決して、總攻を相催し、持楯をつき寄せ／＼相近づく。城兵も破られじと、拒ぎ戦ふと雖、敵多勢なれば、入替り／＼攻立てし程に、城兵等如何に勵むとも、終には攻落されぬべく見えにけり。斯る所に同國の湯淺・山本・野川・賢川・玉置・鈴木・雜賀以下四十餘騎、土丸の城兵を助けん爲め、後詰として、寄手の陣後十餘町近く迄寄せ來る。細川・山名以下大に驚き、先後より敵に攻立てられなば、由々しき大事なるべしと、諸勢本の陣所に引退き、湯淺・山本等と對陣し、互に白眼み合ひてぞ居たりける。斯くて城中糧盡きしかば、今は矢猛に思ふとも、叶ふべからず。一先づ當城を落ちて、山中に引入らば、敵定めて退くべし、敵引かば、又打出でんに安かりなんと、評議既に定まりしかば、宇佐美次郎謀略を巡らし、夜に入りて、城の前なる林の中に、數千の松明をかけて、火を差したれば、寄手の勢大に驚き、すは又敵

は、夜討に寄するぞと、上を下へと騒動す。城兵等は、其間に、搦手より拔出で、十方に落失せけり。豫て相圖せしかば、野上・山本の後詰の勢も、同時に引取りけり。寄手は斯くとも知らず、敵寄すると待ちかけしかども、寄せ來る勢もなければ、又謀られつるぞやと笑ひけるが、夜明けて見れば、城兵は一人もなく落失せたり。扱こそ城は落ちたるぞ。目出たし／＼とて、諸勢翌日陣拂ひして、都を指して歸陣せり。

### 京勢金剛山を圍む事

南方討手の勢、既に太平を唱へ歸陣せし所に、翌日河州の早馬來りて、楠左馬頭正儀・同小次郎正秀父子、千劔破の城に楯籠り、勢ひ強大に候と注進す。將軍大に驚かせ給ひ、同十五日、東寺まで御旗を向けられぬ。細川・山名の人々に、佐々木治部大輔高詮・小笠原將監盛衡・安藤信濃守信泰・宍戸五郎以下を相添へ、三萬七千餘騎をぞ向けられける。此勢金剛山を取圍み、同十八日より矢合せして、晝夜息をも續がせず攻立つる。寄手にも、手負死人日毎に若干出來ると雖、多勢なれば顧みず、喚き



喚きて攻上れば、天地も此時、反覆するかと疑はる。此時正儀父子、敵を一欺き欺かんと、様々思慮を巡らされるが、山名氏清の手に屬せし内浦源次は、郎等の日井六郎が異父兄なりしかば、是こそ究竟の幸なりとて、日井を以て、内浦が方へいはせけるは、城中既に兵糧矢種盡きて候へば、今は旬月を過し難く候故、正成、正行、忠臣の節義を守り、命を戦場に殞し候と雖、何ぞ一塵も私の遺恨を挿み候べき。正儀に、河州一同の守護を給はらば、御味方に參じ、忠戦を勵み候べしといひ送らる。内浦此由を、山名民部少輔に語りしかば、氏清大に悦び、諸將に此事を談じ、京都に注進せられしかば、天下泰平の基、何事か是に如かんと、頓て御教書をぞ出されける。其日數經る間に、正儀父子、金剛山の麓に、山を平げ岸を切立て、虎口升形を堅固に用意して後、當國の守護職の事は、君より賜はつて、既に三代安堵仕り候へば、今更將軍家の辭狀に及ばず候とて、返されければ、兩細川・山名・佐々木の人々大に怒り、又攻道具を用意して、曳やくと攻上る。城中よりは、矢の一筋をも射出さず、旗の手も翻らず、朝夕の煙も絶えて、人ありとも見えざりけり。然れども楠は、代々不測

の良將なれば、又如何なる謀をなしつらん。恐ろしくとて進み得ず。細川右京大夫熟と思案して、兎角敵の糧道を斷ちて、食攻にすべしとて、村々里々へ野伏を配り置き、兵糧の道を差塞ぎければ、城兵等、是には疲れてぞ覺えける。正儀又思慮を巡らし、敵に糧道を斷たれぬれば、始終當城を持懐へん事叶ふまじと、豫て用意し置きたる大竹七百取出させ、和州水越峠へ遣し、雲火數千結付けさせ、同十二月廿七日の夜半過に、本宮鬼七・有茂戸彌平次に、富田林の飛影といふ、名譽の忍びを相添へ、八十餘人を横道に差遣す。相圖の時刻になりしかば、國見坂より、彼雲火に火を放ち、金剛山の奥へと分け登る。寄手の勢是を見て、すはや敵は落行くぞ。追懸けて討取れよ。太刀よ物具よといふ程こそあれ。早數千の雲火は、峯を彼方へ越しぬ。敵は早峯を越せしぞ。あれやくといふ所に、暫あつて水越峠の雲火數千を揚げしかば、寄手呆れて、敵は大和路にかゝりたり。今は追行くとも叶ふまじとて、靜まりけり。國見坂・水越峠へ向ひし城兵等は、岨を傳ひ谷を忍んで、城中に歸りし。此時楠小次郎正秀謀を巡らし、非利法權天と大字に書きたる家の旗一流、八田八郎



にいひ含め、水越峠に捨置かせられければ、野伏共拾ひ取つて、己れが頭香西又太郎が方に持來る。香西悦び、大將細川の陣所に來つて、彼の旗を渡しければ、諸將大に悦び、扱は疑ふ所なく、楠は落ちたるぞと、上下さゝめき渡つて、同廿八日歸陣にぞ起きける。

楠正儀・和田正武卒去附赤坂落取る事

吉野には、南帝後村上院後醍醐天皇の皇子崩御の後、御子長慶院殿相續いて、踐祚の儀坐しけるが、逆も開かるまじき御運の程を思召し知られ、世の中を物うくや思召されけん、今年の春、御位を御弟熙成王に譲らせ給ふ。後龜山院是なり。其より長慶院殿は、御飾を下させ給ひ、何國ともなく出させ給ひ、諸國行脚坐せしかば、南朝拜趨の人々も、いと心細く思はれける所に、天授六年楠左馬頭正儀、重病に侵され卒去せられしかば、官軍勇氣碎け、悲み呑みて、如何はせんと歎きけるが、此事敵に知らせなば、由々しき大事なるべしとて、深く之を隠しけり。紀州の官軍等も力を落し、

楠正儀死去

己が様々十方に分れ落ちて行く。山名修理大夫義理、斯る事とは夢にも知らず、紀州の官方兵糧につまり、退散すと聞えしかば、弊に乗つて討取れとて、七千餘騎にて、紀州阿瀬川の城に押寄する。此城には、湯淺孫六入道禪定が孫左京進、楯籠り居たりけるに、士卒悉く落失せて、今は家子郎等只八騎残りけるが、早晚まで時刻を待つべきぞ。最後の一軍すべしとて、思ふ程戦うて後、皆自害をぞしたりける。

山名氣に乗り、直に土丸の城に押寄せしに、橋本民部大夫、落残りたる軍兵共十四五騎を従へ切つて出で、悉く討死す。恩地伊勢守・野上修理亮・牲川三郎左衛門は、深山に逃げ入りて、行方も知らず落失せけり。されば山名兄弟、五日が中に、紀州の官方を退治せし事、莫大の忠功なりとて、紀州を修理大夫義理に恩賜ある。舍弟氏清は、去る應安より、南方の押へとして、十二年の勳功を積みたれば、先祖義家朝臣、奥州十二年の在陣に同じ。是當家の嘉例なればとて、陸奥守にぞなされける。然るに和田和泉守正武、弘和元年の冬、俄に疫病に侵され、卒去せられしかば、家子郎從共も、盲人の杖を失ひ、海路に楫を斷ちたる心地して、縁にふれ便に付けて、我もく

和田正武死去

楠正儀・和田正武卒去附赤坂落取る事



と、拔々に落ちて行く。山名陸奥守氏清、此由を聞き、泉州堺を立ちて、同じき二年正月二日の晩景、赤坂の城に押寄せたり。城中には、和田孫次郎・同孫三郎・同小市以下三十八騎、落殘されてありけるが、少しも疑議せず切つて出で、十方に駈立て、南北に馳巡り、千變萬化して戦ひけるが、多くは討たれ、残りし者共は、多勢の中を切抜けて、八方に分れ落ちて行く。此の戦功に依つて、氏清に、和泉の國をぞ賜はりける。

### 河州平尾合戦の事

さる程に南方には、楠典厩正儀、和田和泉守正武、相續いて卒去せられしかば、官軍は氣碎け力盡きて、如何になり行く世の中ぞやと、大息をつき流す。されども正儀の子左馬頭正秀、其子小次郎正盛、猶も千劔破一城に引籠り、時の至るを待たれける所に、士卒等次第に落散りて、城中の兵僅二百七十騎にぞなりにける。然る所に大樹義満公、紀州玉津島の眺望を遊覽あるべしとて、元中五年八月、紀の路に赴き給ひ

けるが、同八日、和歌に着かせ給ひ、同十八日には、歸洛し給ふべきにぞ極りける。楠左馬頭正秀此由を傳へ聞き、急ぎ吉野殿へ使者を以て、加勢を賜はるべしと乞はれしかば、竹林院の三位花山院少將を大將にて、和田修理亮堀口三郎以下八百餘騎に、吉野十八郷の野伏共を、相添へてぞ遣されける。典厩大に悦び、大樹の歸路を遮らんと、同十七日の夜半、千劔破を打立ち、平尾を越えて、和泉路に向はんとぞ急がれける。河州の押へとして、山名陸奥守氏清、赤坂の城に在りけるが、山川入道馳せ來つて、此由斯くと告げしかば、山名からくと打笑うて、當時の楠が分際にて、大樹の旅行を妨げんや。いでく打散らして捨つべしと、三千五百餘騎を引率し、其夜の寅の刻、平尾に馳着き、敵の近づくを待ち居たり。既に未明に及んで、典厩正秀、静り返つて押來られけるが、朝霧の晴間より、向ふを屹と見やりたれば、三引兩の旗數十流、秋風に翻り、混甲の兵、沓の子を打つたる如く充滿たり。楠が勢案に相違して、味方の密計早敵に泄れぬるにやと、驚き辟易す。山名が先鋒小林修理亮が五百餘騎、同音に鬨と作る。時に恩地伊勢守、牲川左衛門二人、眞先に駈出で、金



銀の采配を抜きて、今日を限りの運命ぞや。只切入りて討死せよとて、駈出せしかば、士卒是に續きて、一同に咄と切入りて、今日を限りと戦うたり。吉野十八郷の野伏共、馬武者に駈立てられ、村々に逃げて行く。左馬頭正秀、貳き者共の舉動かな。返せやくと下知して、縦横無碍に駈立て、天地も反覆せよと、喚き叫んで戦はれしが、志貴・賢川・平野・安間・高安を始め、百六十騎討たれて、殘兵等も朱になり、戦ひ負けて引行けば、山名が勢は、勝鬨作つて引取りけり。是よりして南朝の帝位彌衰へ、官軍の勇氣猶も盡き果てぬ。薄情しかりし分野なり。

### 南北兩朝御和睦附三種神器御歸洛の事

さる程に京都には、公家武家内々評定あつて、南北兩朝和睦の儀を取り議るべしとて、大内左京大夫義弘を、四位の少將になされ、南方にぞ遣されける。大内、吉野殿に參内し、北畠少將顯教朝臣を以て、南北御和平の儀、種々言を盡し、理非分明に奏せしかば、南帝御許容坐し、叡感甚だ淺からず。朕久しく南山に居して、一度聖代に歸

楠正秀敗る

南北兩朝御和睦成る

せしめ、九重に徳光を耀かさんと思ひしに、聖運微なるが故に、外都邊鄙の土と化して、天涯望郷の鬼とならんとす。天に二つの日なく、地に二の主よたりなしといへり。天神地祇も、何ぞ朕を助け給はん。早く不肖の身を退けて、天下萬民の歎きを止むべし。三種の神寶を渡すべしと乞ふ事、大儀の一事にして、諸臣の異見區々なりと雖、朕朝政を務めずして、何ぞ繼體連綿たる三種の神寶を抱くべき。若外土の塵となし奉らば、吾朝の王道、永く廢れなん。然る上は、義弘が望みに任すべしと、敕許なされけり。還幸は十二月二日と定められしかば、大内義弘、束帶の下に腹巻を着し、吉野の本丸殿に參向し、神器を請取り奉る。御迎の人々には、一條内府經嗣公・徳大寺左府實時公・久我右府具道公・花山院大納言道定・今出川大納言實直・三條大納言公豊以下なり。頓て三種の神寶を、鳳闕に移し奉る。同十五日南帝吉野を出御なされしかば、洛西嵯峨の大覺寺の舊跡に入れ奉り、花山院大納言道定卿を敕使にて、太上天皇の尊號を進せらる。是に依つて後龜山院と號し奉る。是より參り仕ふる卿相雲客もなく、閑庭の松風より外は、音信れるものもなければ、明暮御物思ひの



數添へて、御涙の乾く隙もなし。

### 畠山金吾河州發向楠正秀父子千劔破籠城の事

斯る所に楠左馬頭正秀は、南帝都に出でさせ給ひしかば、幼子の母に後れ、窮鳥の翼を殺れたる心地せしかども、今一度義兵を揚げ、骸を戰場に曝して、義名を末代に残すべしと、平一揆を始め、討殘されたる郎等共、又吉野十八郷の野伏共を駆催し、一千六百餘騎にて、千劔破の城に楯籠らる。是に依つて同十二月廿日、畠山右衛門佐基國、討手の大將として、五千餘騎を引率し、都を立ちて、同じき廿二日河州に着陣し、赤坂守屋・龍泉寺に陣を取り、足輕の射手五百餘人を、水越峠に差遣し、城中の糧道を差塞がせ、足輕二百人を、五條峠に遣して、南方よりの人馬の往來を止めしかば、如何なる楠ともいへ、あぐむべくぞ見えたりける。斯くて畠山は、先づ城中の虚實を窺ひ知るべしとて、斥候の勢八十餘騎に手垂の射手を相添へ、金剛山本見山へ差遣す。素より城中靜まり返つて居たりしかば、城中の虚實を窺ひ知らばや

と、古へ元弘に、東國勢の梯を渡さんと巧みし所ぞ、城中へは近けれとて、遊佐七郎三百人の射手を率し、彼所より射させけれども、其程遙に遠ければ、其矢悉く谷底へぞ落ちにける。時に城中より、田邊六郎太郎、此數十年巧み置きたる強弩を、曳と發しければ、寄手三人、一矢に打通されて、跡なる士卒二人、痛手負ひて百と伏す。寄手是に驚き、我先にと逃げ退く。白江彌五郎一人踏止り、此矢五日が中に射返すべし。當城を落さん事、日あるべからずと、高聲に匂つてぞ引取りける。楠正秀父子大に怒り、故正成より以來、末期の一箭と定め置かれたる強弩を、今日放ちぬるこそ、運命盡きぬる驗なれ。寄手是を習つて、金剛山の尾崎より、此強弩を放たば、落城疑あるべからずと。大に仰天せられけり。斯る所に寄手、強弩を巧出し、峯より差下して放ちければ、城中防ぎ兼ねて騒動す。此弊に乗つて攻立てよと、千劔破村より攻懸りしかども、城兵共能く防ぎ戦ひしかば、寄手討たる者數を知らず。是に依つて加勢として、京都より赤松上總介義則今川左衛門佐仲秋以下、六千餘騎を差向けらる。寄手是に氣を得て強弩數百を用意し放ちかければ、さしもの城兵



楠正秀敗走

等、術計今は盡き果て、持味ふべくもあらざりしかば、左馬頭正秀、殘兵等を従へ、或夜風雨の紛れに、城中を忍び出で、何地ともなく落ちられけり。舍弟楠小次郎正元は、千劔破落城の後は、彼方此方とさまよひけるが、何とぞして、大樹義滿に近づき、多年の本意を達せばやと案じけるが、恩地が再從兄弟安間左近將監、其頃は降人に出で、京方にありければ、渠が許に忍び行き、日毎に窺ひ廻りけるに、何とかして顯はれけん、同五月十八日の未明に、侍所赤松が所司代浦上七郎兵衛行景、六十餘騎にて押寄せ、安間が宿所一條柳原を取巻きて、門戸を破つて込入りしかば、正元少しも騒かず、菊水の太刀を引きそばめ躍り出でて、向ふ敵一人切伏せ、五人に手負せて、猶も進んで戦ひけるに、敵先後より取包んで、終に正元を搦め取り、翌十九日夜、千本の松原にてぞ誅せられける。

楠正元殺さる

### 南方殘黨三種神器を奪ふ事

茲に南方宮方の殘黨共、芳野に馳集つて、重ねて本意を達せんとぞ議りける。然る

南朝の殘黨神器を奪ふ

に過ぎにし南帝の宮、二所坐しけるが、一方は萬壽寺に入らせ給ひて、出塵の徒とならせ給ひ、一方も、同じく釋門に入らせ給ひ、圓滿院に坐しけるを、賺し出し奉り、還俗なし參らせて、吉野の新帝と仰ぎ、吉野十津川・觀心寺・叡山・高雄を始め、所々に要害を構へ、天下を覆さんと巧みけるが、先づ三種の神寶を奪ひ取るべしとて、文安三年九月廿三日の夜半計に、南方の餘黨二百餘騎、禁門に亂入す。一手は御坪の内より攻入り、一手は清涼殿の坤の方、殿上の下口より切入つて、前殿に火を放つ。主上も辛うじて御出座せしかば、上伏の殿上人二人、漸々御手を助け奉る。敵兵間近く追かけ奉り、既に危く見えさせ給ひしかども、兎角して他所に行幸なし奉る。一揆共、安々と御寶物を盗み取り、散々に落ちて行く。其夜東門の番黒田判官が手の者青地四郎・木本新介兩人追かけ、敵二人切伏せ、三人に手負はせて、其餘の者共を追散らし、難なく内侍所を奪ひ返し奉る。寶劔をば取落して、清水寺の門外に捨てたりけるを、翌日鏡月坊の阿闍梨是を捧げ奉る。神璽は一揆等終に奪ひ取りにけり。是は日野儀同三司有光子息右大辨資親、内通同意の聞えあり。さるに依つて父



子共に召捕られ、黒田判官に預けられけるが、終に死罪にぞ行はれける。さる程に一揆等は、先帝第三の宮萬壽寺に御坐しけるをも取奉り、叡山の北谷に取籠りけるに、京勢押寄せ、無二無三に攻立てしかば、餘黨等は落失せて、宮は御自害坐しぬ。一色兵部丞御首を給はつて、夜中に京都に引返す。薄情しかりし事共なり。

### 神璽御歸洛の事

茲に去嘉吉元年、普廣院義教公を弑し奉りし赤松左京大夫滿祐が弟伊豫守義雅が孫伊豆守政則、流浪の身となり居たりけるが、未だ幼少なりしかば、家子石見太郎祐元養育し、京都に忍び上り、三條内大臣實量公に仕へけるが、折々は赤松が家の衰へし事を、語り出してぞ歎きける。内府も、赤松とは、互に子孫七代まで見放つべからずと、代々の誓約ありし故、内々彼方族を取立て、先祖より違變なき志をも顯すべしと、様々思慮をぞ巡らされける。石見忍びやかに申しけるは、當時の分野を見候に、細川山名の兩家、天下に威を振つて、互に權を争はれ候へば、大亂近きにあ

るべく候。然れば細川勝元に屬し、當家の事を歎き候はゞ、勝元幸と悦び、政則を取立て、山名に敵せさせんと思はれんは、治定候といふ。内府聞き給ひ、其も何とぞ、一つの功なくては叶ふべからずと宣へば、其こそ究竟の事の候。當時の宮の御方に候なる神璽を、盗み返し候はん。案内をば能存じて候といふ。内府悦び、然らば其謀をなすべしと宣へば、其より石見、豫て巧みし事なれば、年來の傍輩間島三郎太郎・中村八郎二人に心を合せ、術を能々いひ含め、南方にぞ遣しける。二人は吉野に立越え、奉公を勤め、忠節を顯すべき由望みしかば、宮大に悦ばせ給ひ、渠等は赤松が家人にて、京都へ恨みある者なれば、よも二心あらじとて、賞愛甚だ淺からず。二人の者共、今は仕濟したりと悦び、將軍義政公の治世長祿二年八月、密に宮を刺殺し奉り、彼神璽を奪ひ逃げて行く。吉野殿に有合ふ者共、遁さじと追懸くる。二人踏止つて、眞前に進む者共五人迄切倒せば、其勇氣に怖れ、此彼に群り立ちて、遠矢に射る。中村八郎矢二筋射立てられ、曾て働き得ざりければ、今は叶はじと思ひけん、間島に向ひ、御邊は如何にもして此所を落延び、年來の本意を達せられよと



いひ捨て、腹搔切つて伏しければ、三郎太郎も、同じ枕に死して、信を守らばやと思ひしかども、いやしく、其は大不忠の至りならんと思ひ返し、息を限りに落延びて、漸々と都に歸りければ、内府を始め、石見太郎大に悦ぶ事限りなし。頓て管領細川勝元の方へいひ送られしかば、勝元甚だ悦び、朝廷へ執奏し、神璽を内裡に納め奉り、公武に對し、專一の忠功なりとて、赤松次郎政則に、加賀半國をぞ與へられける。去ぬる延元元年、後醍醐天皇吉野へ移らせ給ひしより、後村上天皇、長慶院、後龜山院相續いで四代、明德三年に至つて五十六年、今長祿二年に及んで、凡百二十餘年、南朝の號終に絶えて、後深草院の御末永く、本朝の主とならせ給ふ。目出たかりける事共なり。

### 南朝太平記卷第廿四大尾

大正三年三月十七日印刷  
大正三年三月二十日發行

國史叢書  
南朝太平記全一冊

定價金一圓

編者 黒川眞道

發行者 國史研究會

右代表者

小瀧淳

印刷者 橘山定吉

東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷所 友文社

東京市神田區三崎町三丁目一番地

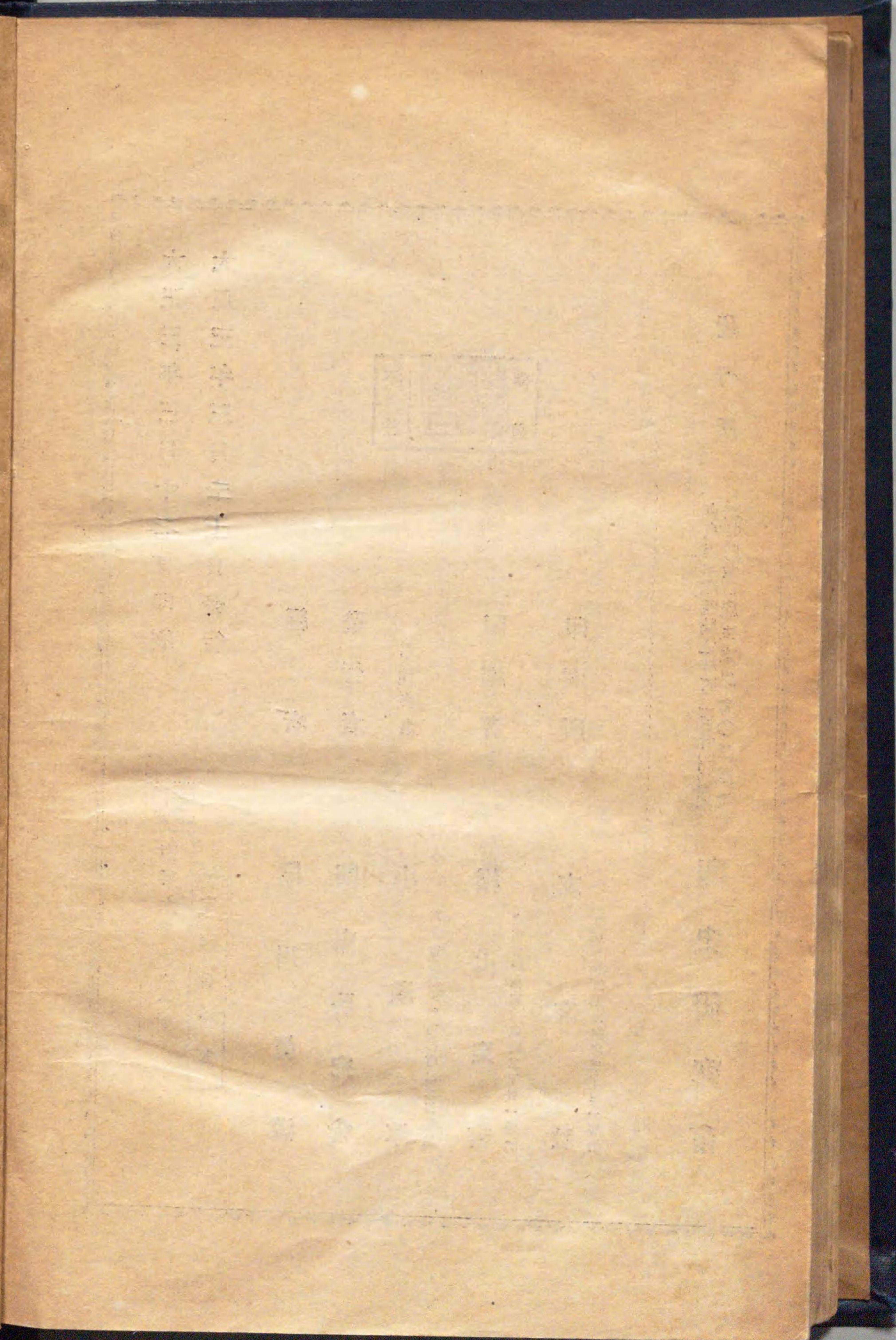
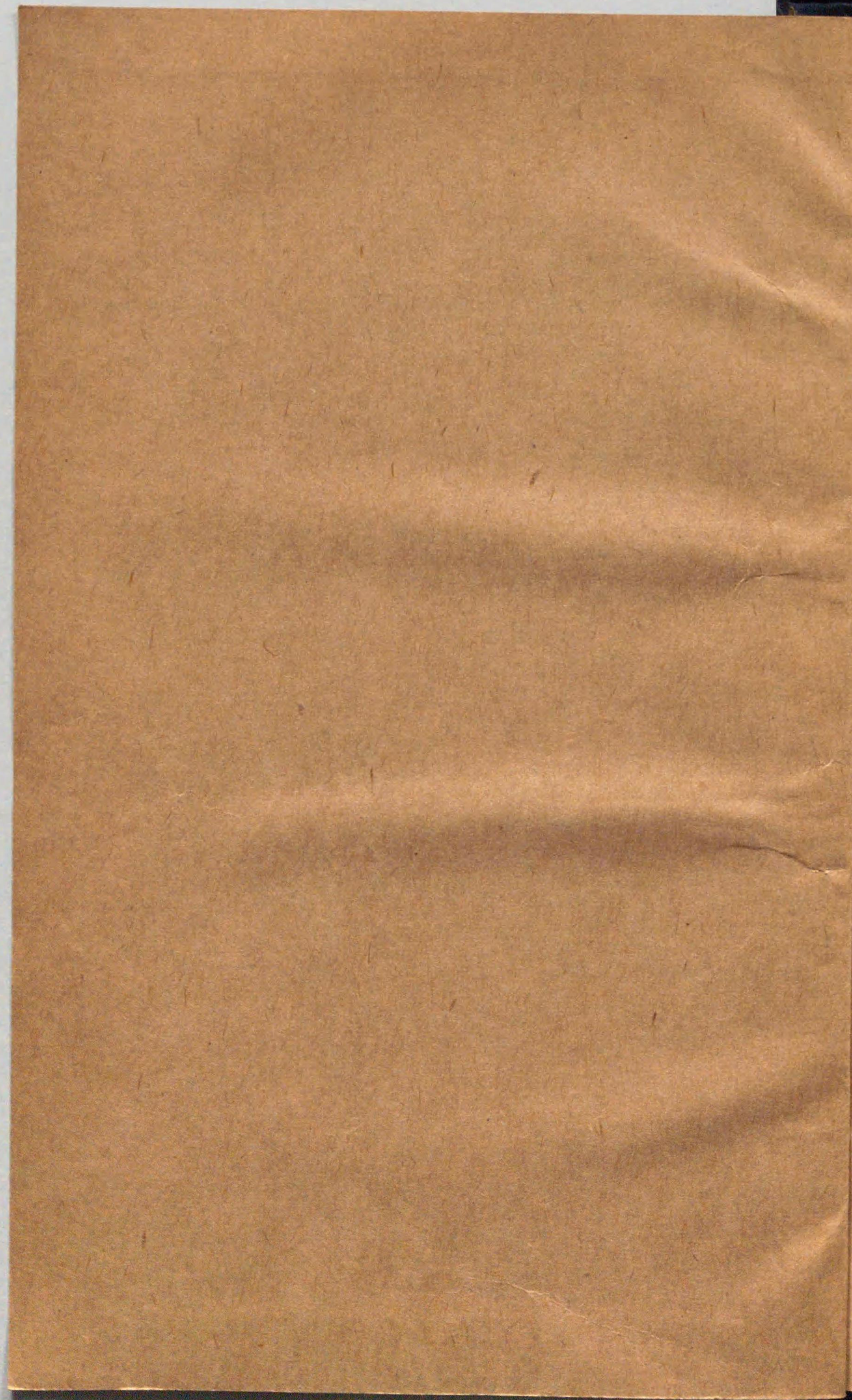


發行所

東京市本郷區駒込林町二百廿四番地  
振替貯金口座東京二七〇二四番

國史研究會







340  
313



